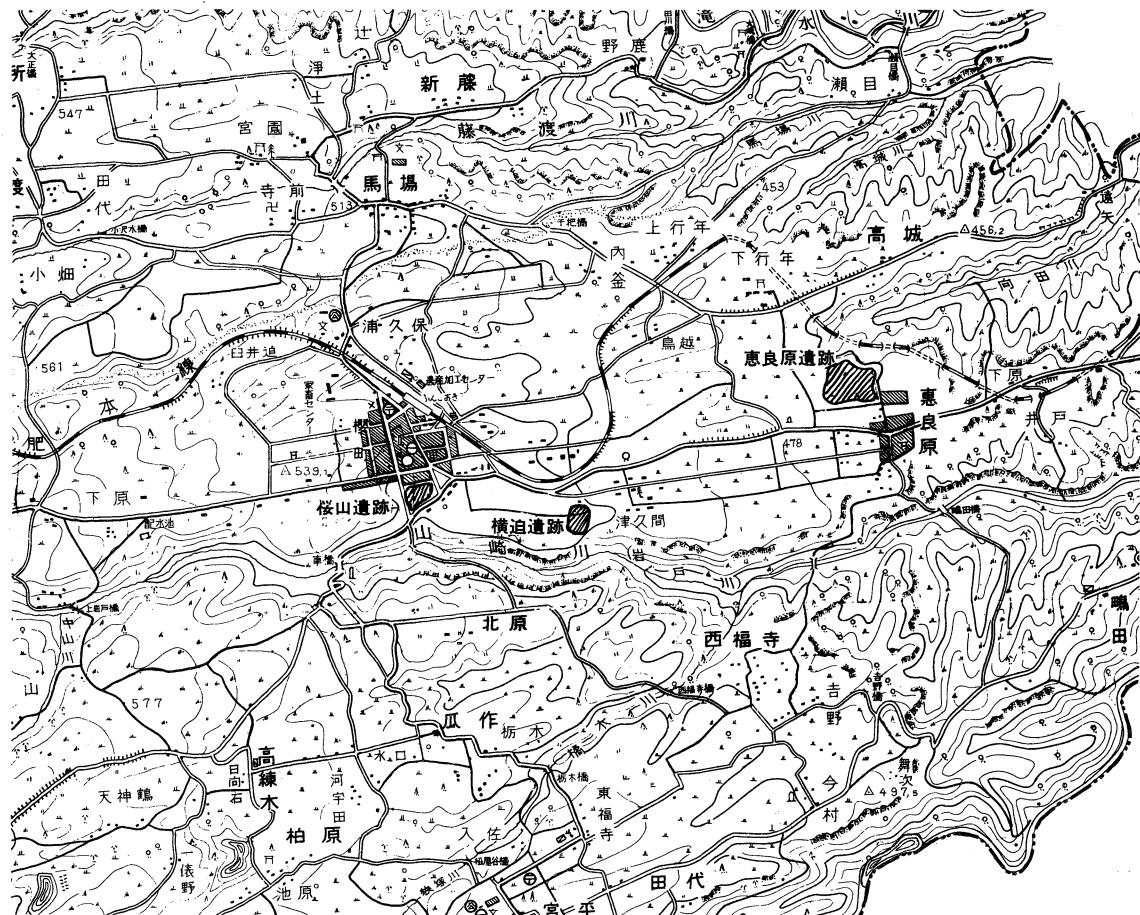
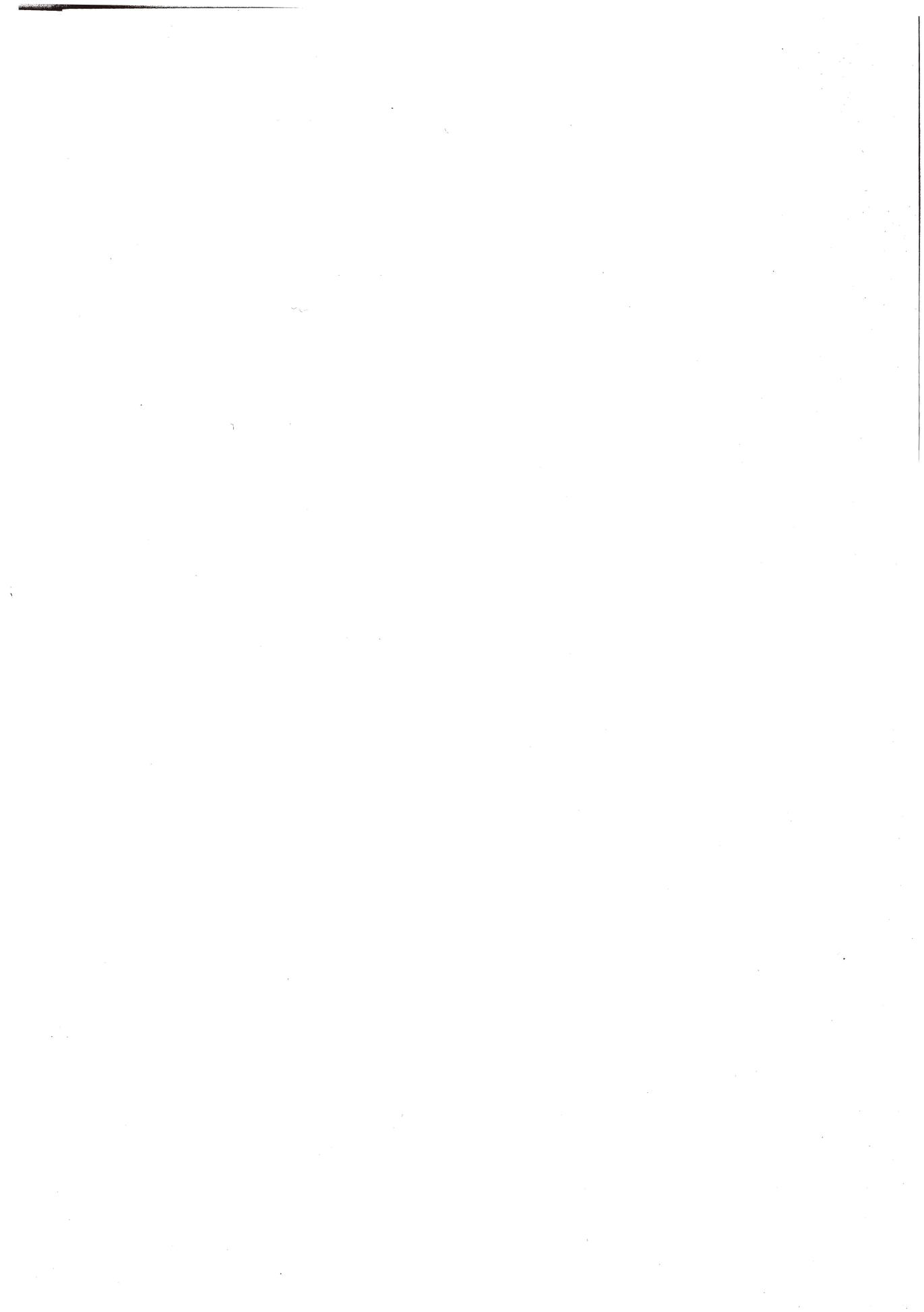


# 縄文晩期農耕の起源に関する研究

(大分県荻町桜山遺跡 恵良原遺跡 横迫遺跡)



1 9 7 1



## はじめに

本概報は1971年文部省科学研究費一般研究Bの交附を受けた、「日本における農耕文化の起源」（縄文晚期農耕の研究）による調査概報である。

桜山遺跡の追調査、横迫遺跡の学術調査、小高野遺跡の発掘（以上大分県）に加えて宮崎県舟野遺跡の発掘などの調査のうち、小高野遺跡における縄文晚期の有望なカメ棺墓地群は、今後、集落と併せて概報を呈出したい。また舟野遺跡では、基礎調査の予測に反して、遺跡が攪乱されていて成果が得られず、縄文晚期の、集落と環境調査となつた。したがつて本報告は、桜山、横迫の二遺跡に、炭化コメの出土した、恵良原遺跡に限つておこなつた。

桜山遺跡では、西田道世研究生、横迫遺跡では牧尾義則が報告書作成に協力された。

文部省科学研究助成課は、この概報出版に研究費の一部支出を認められ、これに成果の一部が公開されたことは当局の理解にもとづくものである。



## 目 次

- 1、縄文晚期（農耕の起源）の研究
- 2、大野川上流域（阿蘇外輪台地）の調査
- 3、桜 山 遺 跡
  - 層 序
  - 遺 構
  - 遺 物
  - 小 結
- 4、恵 良 原 遺 跡
- 5、横 迫 遺 跡
  - 層 序
  - 遺 構
  - 遺 物
  - 小 結

「日本における農耕の起源」（縄文晚期農耕の研究）は、下記の人達の共同研究である。

研究担当 (考古学) 賀川光夫 (別府大学文学部)  
研究協力者 (〃) 小田富士雄 (〃)  
〃 (〃) 橘昌信 (〃)  
〃 (歴史学) 今永清二 (〃)  
〃 (〃) 志垣嘉夫 (〃)  
〃 (人類学) 内藤芳篤 (長崎大学医学部)  
〃 考古学 人類学 坂田邦洋 (〃)

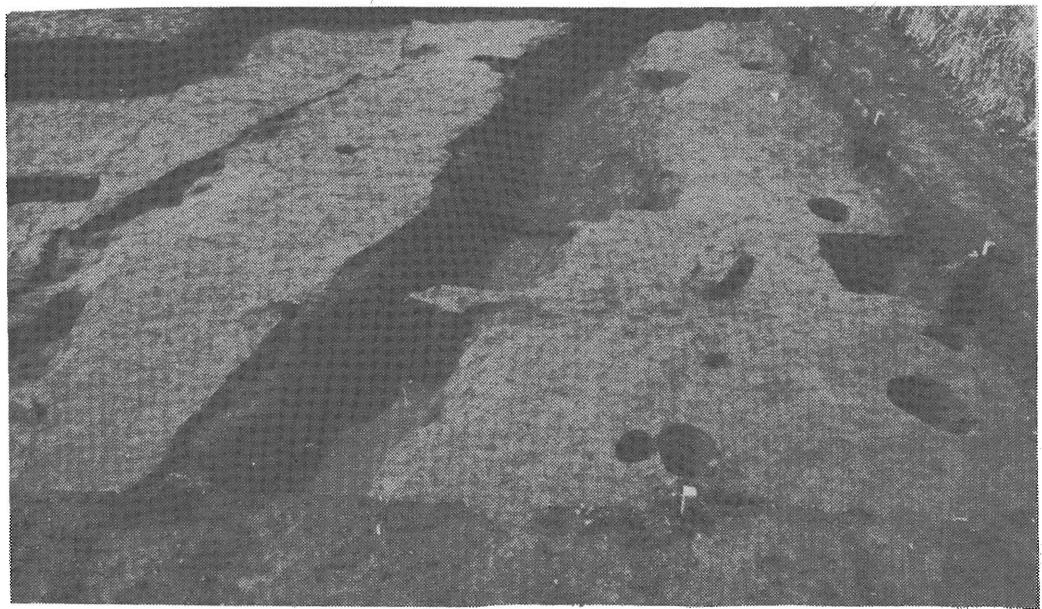
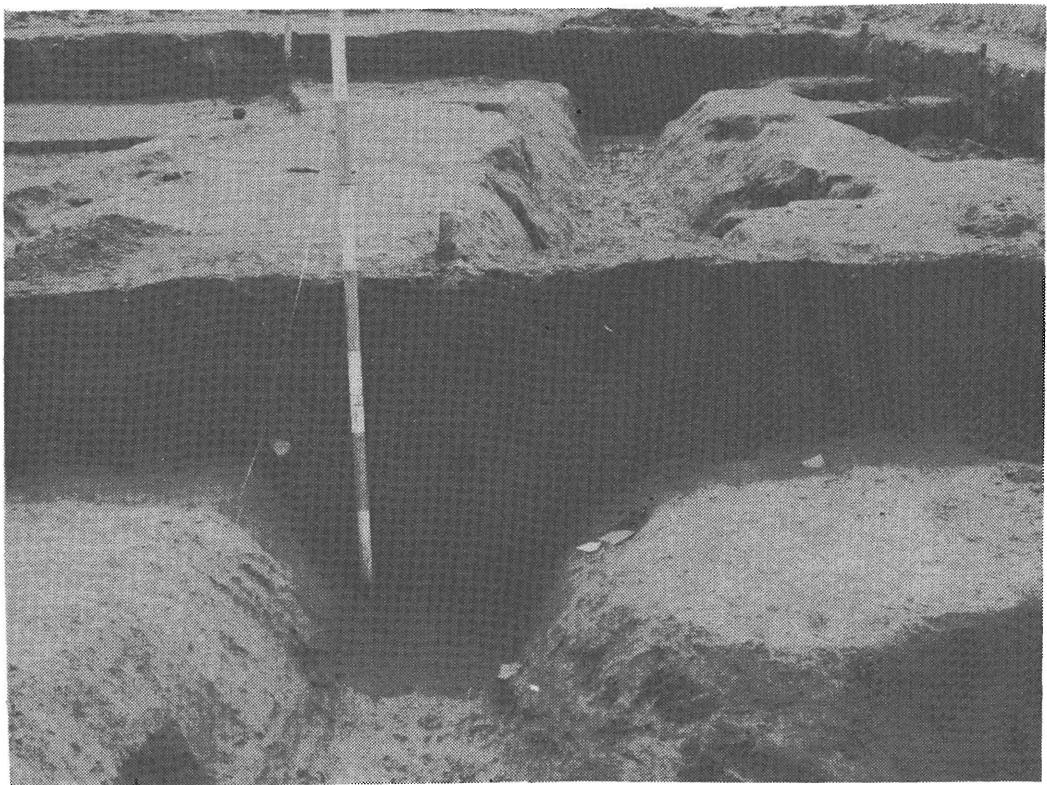
## 1 縄文晚期（農耕の起源）の研究

九州各地に分布する縄文晚期の遺跡、そこから出土する「黒色研磨土器」と、扁平（剥片を含む）石材加工の石器群とが注目されたのは、1955年前後の頃であった。当時、九州では弥生式文化の源流を探求する目的での「弥生式文化特別委員会」が考古学協会で設置されていた。当然の如く、弥生式文化の源流は、縄文文化終末期の問題にふれることになった。森貞次郎、岡崎敬、そして中央から杉原莊介などが参加した。福岡市郊外の板付、夜臼遺跡の調査から、縄文終末期の関心を強めていった。そして、その最大の関心は、水田経営の起源ということであったようだ。大陸からの生産技術の影響を総合的判断にもとづいて、唐津周辺に調査地区を設定し、柏崎貝塚の発掘をとうして、弥生式文化の前段の問題を提起した鏡山猛の「柏崎式土器」の設定は非常に興味深いものがあった。

さて、こうした弥生式文化の源流追求とは別に、縄文文化終末についての研究がおこなわれた。北九州では雲仙岳周辺の山脈一帯、中九州では、大野川流域一帯、そして南九州では、薩摩半島、大淀川下流一帯などで有望な遺跡の調査がおこなわれた。

1955年以降の、これら各地域の調査から、集中的に検討を要すべき遺跡の徹底的調査として、1958年以降、5次にわたる大分県大野郡緒方町大石遺跡の調査がおこなわれた。この調査では、土器、石器の研究のほか、住居地域や、大きな竪穴（階段状）などの露出に、興味深い遺構も発見された。生産技術や、集落の構造にいたるまで、重要な問題を提起した大石遺跡でも、具体的な育種資料や、埋葬の問題にはふれることができなかった。そして、縄文晚期農耕論が、生活環境（自然、生態学的問題）や、育種学的問題をふまえて再検討を必要とするとき、筆者は病のため3年間の静養をしなければならなかった。

1970年頃から再度の調査がおこなわれ、1971年度文部省科学研究費を受けて、大野流域、特に大分県直入郡荻町横迫遺跡の調査、同じく桜山遺跡の再調査などが実施され、加えて、竹田市小高野遺跡において有望な墓地群の発掘がおこなわれた。この調査は、縄文晚期における集落の構造と生産活動についての精度な調査で、水洗方式で炭化物の検出も実施された。更に、植物生態学的研究にもとづき、遺跡の立地などにも注意をはらった。本文は、1955年以降注目された縄文晚期農耕論が、植物生態学などの関連科学の不備から、再考を必要とされたいいくつかの問題をふまえて実施された、1971年度の調査概要である。そしてこの調査により、更に必要な研究が、いくつか残されていることを知った。これらは、弥生式文化前段の問題として今後継続して調査されなければならないと考える。



第1図 縄文晩期横迫遺跡の住居地帯条溝

## 2 大野川上流域（阿蘇外輪台地）の調査

九州の中央、阿蘇山の東方は、広大な熔岩台地が東に向い、大野川の主流に合流する諸河川は、熔岩台地を浸蝕して深い谷を作る。熔岩台地は、大野川上流の諸河川によって切断され、東に向って舌状に延びる丘陵となる。

1971年度の調査地域は、竜水川、岩戸川、大谷川など大野川の上流域の諸河川が、深い浸蝕谷を形成し、その河川間を東に延びる荻台地と柏原台地などの、標高550mから470mの台地に位置する遺跡群である。

調査の対象となった荻台地桜山遺跡は、標高530m、横迫遺跡は510mであって、いづれも、岩戸川の深い谷に沿った台地南縁に位置する。1970年11月、地元荻町山村高啓氏が恵良原遺跡で、縄文晩期（又は弥生前期）の遺構（貯蔵穴と推定）から発見された炭化コメは、横迫遺跡より1.5km東の台地縁辺、標高478mの位置にある。

荻台地は標高550mから450mの間、西から東に向う緩傾斜の台地で、北（竜水川）と南（岩戸川）に深い谷が走る。谷の底は横迫遺跡の南、岩戸川450mで、遺跡との較差は60mを数える。したがって、台地上と、谷間との気温の差は相当大きいとみられる。横迫遺跡附近の年平均気温は14.1°Cで、1月は2.5°Cである。炭化コメの出土した恵良原遺跡は、標高478mであるが、台地上のよく似た環境であることから、40m程度の高度差では、気温や雨量差はないとみてよい。雨量は、荻台地で年間2000mmであって多雨現象をしめす。

荻台地全域の植物環境を観察してみると、常緑広葉樹林がみえない。落葉ブナ帯を形成し、クヌギなどが目立つ。この熔岩台地の南北を刻む深い谷には、イチイガシとクヌギ、ブナが混生していて、谷底には顕著に常緑広葉樹林が目立つ。全体としては、台地上はナラ層、谷間はカシ層地帯で、ブナ科の世界を形成し、秋には多量のドングリを結果する。

大野川中流の大石遺跡では、標高400mで、年平均気温14.8°C、1月の平均が3.6°C、年降雨量が1870mmで、横迫遺跡とは、1月の平均気温で、1.1°Cの差がある。この1°C差で大石遺跡にはイチイガシなどの常緑広葉樹がみられる。

大野川中流域より上流の河岸段丘や熔岩台地に広く分布する縄文晩期遺跡は、ブナ科の植物帶で、常緑を主に、落葉ブナ科の混生地帯であるといえる。このように植物帶から、秋には豊富なドングリの結果がみられるので、この堅果は、水晒によって多量の澱粉が得られることになる。大野川流域で更に顕著な植物にクリがある。

ブナ科の植物帶における縄文晩期の遺跡は、大石遺跡の如く、広い集落を形成する。横迫遺跡や

桜山における集落の構造をみると、単位集団とみられる共同体の形態がみられる。埋葬にはカメが使用されたとみられ、集落や、埋葬に従来の縄文文化の様相とちがった状態を知ることができる。こうした集落形成や、集団の定着化には、照葉樹林帯におけるドングリなどの食糧に加えて、栽培が存在したことと意味する。

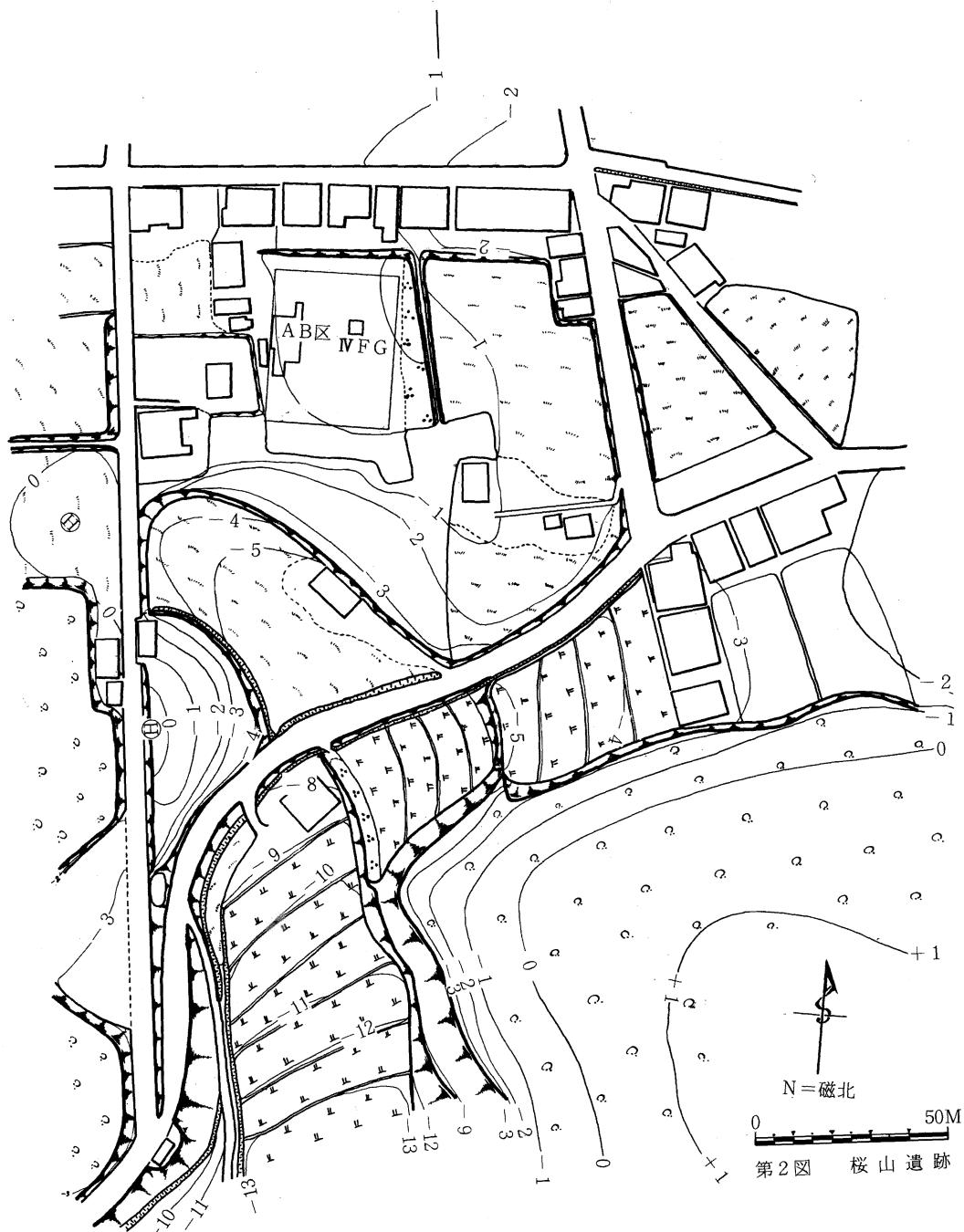
栽培については、実証を重ねて、その経営が明かにされた弥生文化の実態を大いに参考にしなければならない。特に弥生文化における狩猟の存続とも併せ、縄文生産における斧の機能など、栽培における生産具に注意しなければならない。近時、石斧の着柄の研究では、低湿の弥生中期遺跡から出土した木器の曲り柄に、石斧の装着を具体的にした例が多数報告されている。斧の用途は、弥生文化の生産（農耕）に欠くことのできぬ耕具であった。最近福岡平野の弥生後期の出土品として、青銅の鋤先が発見されているが、これこそ水田経営の利器として注目せねばならない。

青銅の鋤先が発見される弥生後期は、縄文の存続化が一掃されて、水田経営に基盤をおく、生産の集約化が促進された。この金属の利器が生産に投入されるまでの間、弥生前半の生産技術は、大きくて原初農耕的な状態であったと考えられる。斧の機能が生産の主要な要素であったことと併せ、「斧の農耕」の問題をあらためて提起しなければなるまい。「斧」を原初農耕の主生産具とする考えは、大陸の農耕論でも同じである。「斧」に二つの用途があることは、すでに幾度も論説したが、打ち割るための重量を必要とする斧。削り、おこす、扁平な斧。この二つとも農具として必要なのである。こうした原初農耕の主生産具について、それぞれ役割を果す機能として観察することができる的是、縄文晚期から出土する夥しい数の石斧群である。こうした「農具」としての主生産具、「斧」の多量出土の中九州、大野川流域の縄文晚期遺跡は、照葉樹林文化を想定するのに魅力ある遺跡群といふことができる。

### 3 桜 山 遺 跡

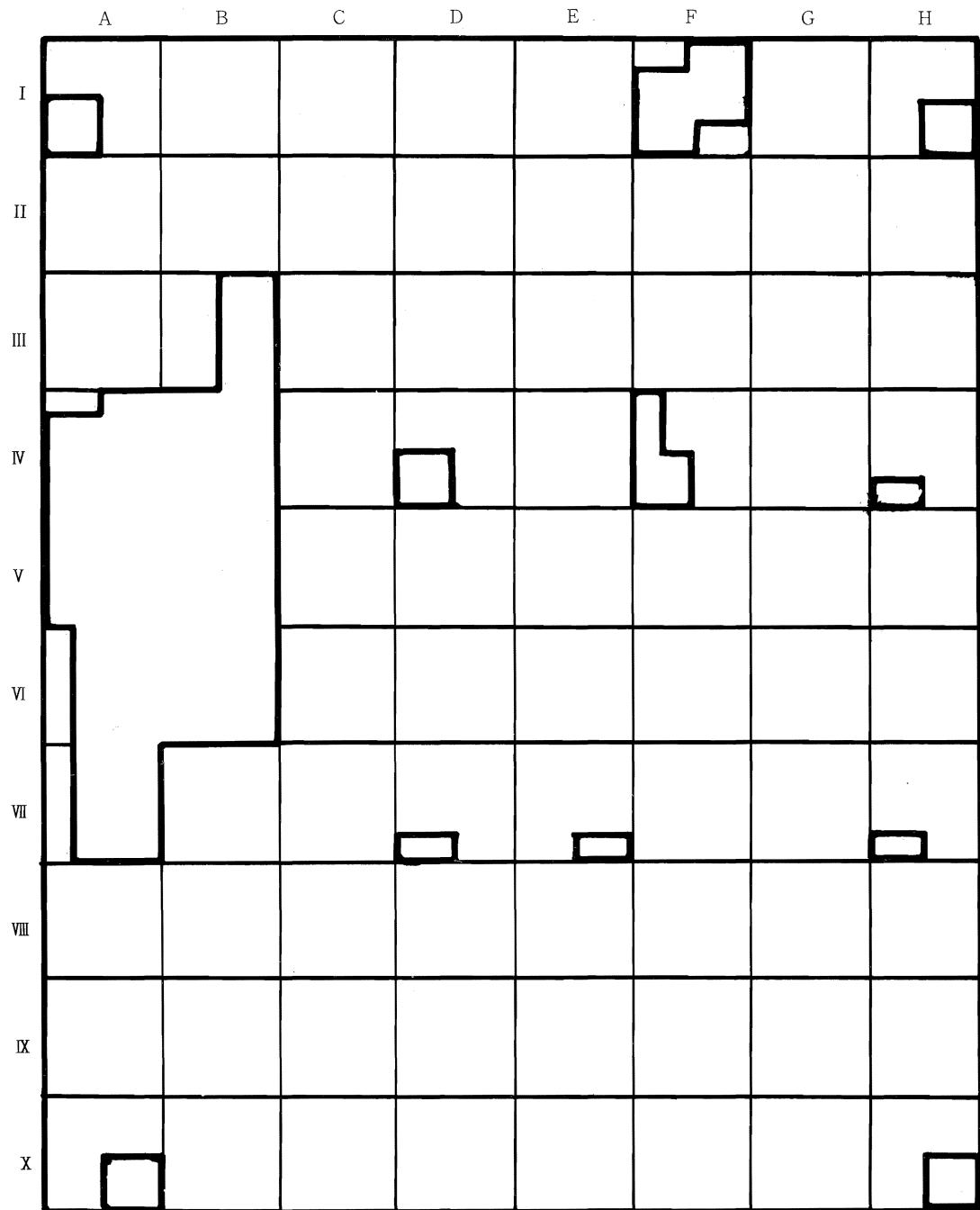
大分県直入郡荻町桜山遺跡は、1967年度に調査を実施、1971年に再度の調査を実施した。遺跡は、阿蘇熔岩台地が東方に延び、それが各所に浸食谷の形成によって切斷され、それぞれ舌状台地を形成する。その一つ、荻台地は、北を滝水川、南を岩戸川（山崎川）によって切斷された、東に延びる舌状台地である。

台地のほど中央に荻町がある。その市街地の南、市街地に接して桜山遺跡があるが、遺跡の南は、岩戸川のつくる深い渓谷がつづく。この一帯は広大な原野に設営された、比較的新らしい市街地で、区画整然としている。



遺跡附近は、前述の如く阿蘇熔岩台地上に厚く堆石した火山灰地帯で灰土による幾枚かの土層によって形成される。遺跡として主要な位置と推定される桜山、合沢嘉平宅前の畑（陸稻）を 128 平方メートルの広さにわたって調査がすゝめられた。調査方法は 4 m<sup>2</sup> の調査区を南北に 10 区、(I-X) 東西に 8 区 (A-H) とし、I-A, I-F, I-H, IV-D, IV-F, IV-H, VII-D, VII-E, VII-H, X-I, X-H などの調査区で、遺跡全体の様子の検討をおこなった。遺物の包含のやゝ顯著な III

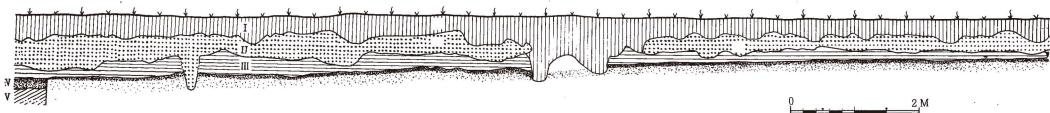
—B～VI—B迄の南北のBトレーニチ附近で、IV—A～VII～Aまでの拡張調査区が設定され、この地区のV—A、VI—Aに遺物がまとまり、その中央部に焼土などが露出され柱穴と考えられるものの存在も多数確認された。遺跡全体の状態は、調査区全体の西南側が自然に高く、この部位を平坦化するため、遺跡の一部をも含めて相当深く削平され、破壊がおこなわれていた。



第3図 桜山遺跡発掘区

**層序** 遺物の包含量の多いA-B地区における層序が、本遺跡を代表する層序と考えることができる。そこでBトレンチの断面観察の結果を述べて、遺跡全体の層序を想定することにする。

I層…表土層、柔らかい黒色土で、黒色灰土の耕土変質によってやゝ褐色をおびる。厚さは30cm平均で、遺跡全体に同じような堆積がみられた。



第4図 A-B区東側断面

II層…漆黒色土層で、I層同様の黒色灰土の堆積層である。上部は一部が耕作により攪乱され、柔らかい土壤となる。厚さ10~20cmである。

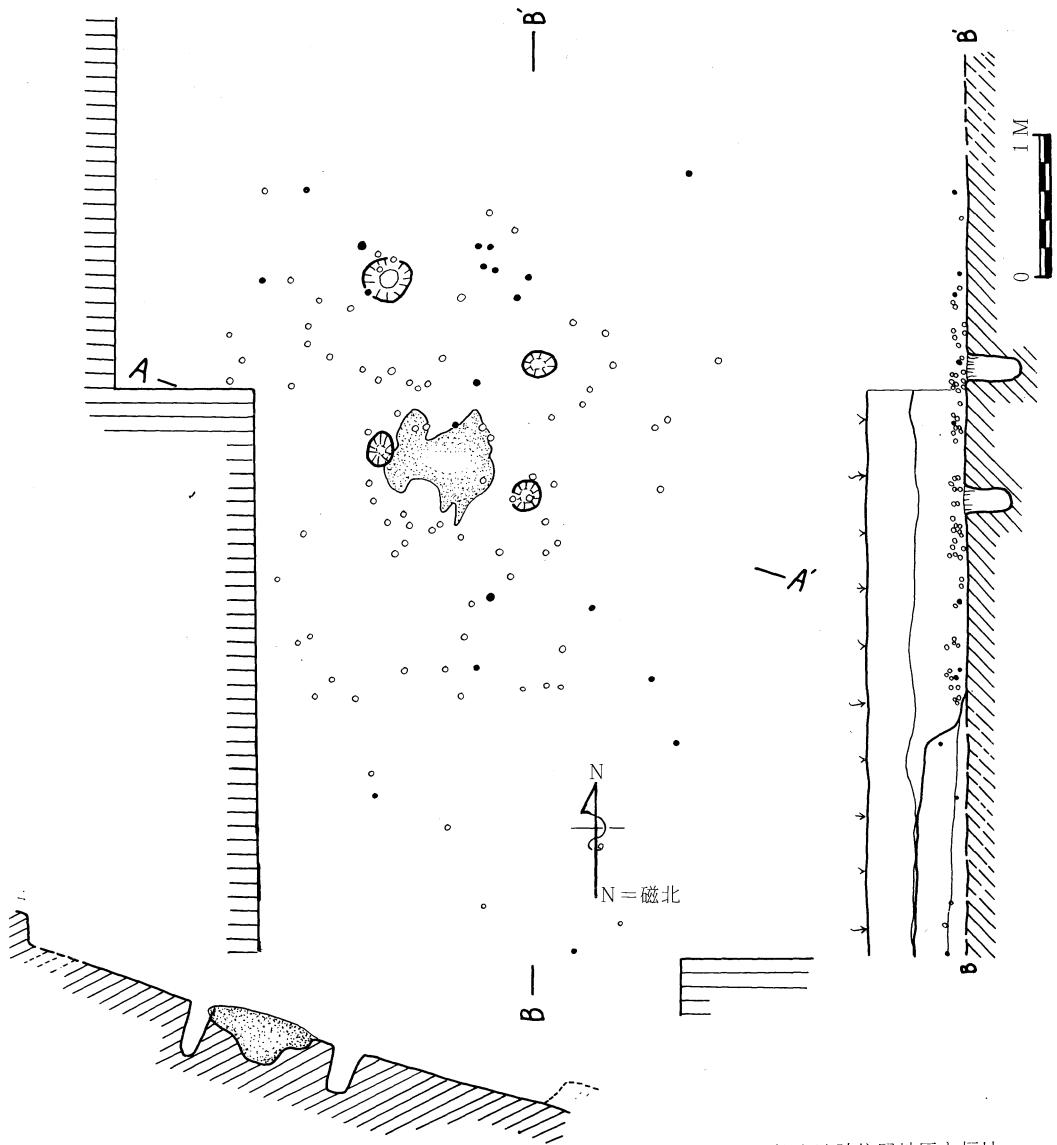
III層…全体が茶褐色で黄色のパミス小粒が含まれる。縄文晩期遺物は、この層に含まれ、層の下部に住居等の遺構が存在する。層は30cm内外の堆積層である。

IV層…褐色土層で、一般に柔かな粒子の細かい土類で、40cm厚さに堆積している。

V層…オレンヂ色の黄色火山灰土層で、B、P5~6000年前の火山灰層といわれる。一般に粒子が荒らく、阿蘇山の東側に広く分布する。南九州の第1オレンヂ層という荒粒子の火山灰土層に類似している。

以上の層位中、包含層はIII層で、縄文晩期1式B土器の単純層である。A、B区の拡張調査区では、晩期1式Bの住居地帯も露出され、調査区全域の各地からも土器、石器が発見されるので、桜山地区III層には晩期の住居地群が存在するものと推定される。A-B地区のIII層は縄文晩期遺物の包含と遺構の存在がみられるが、上部II層に遺物が遊離しているところから、III層の一部が後代攪乱されていると推定できる。したがって桜山遺跡では、住居地帯全域の遺構を完全に露出することはできず、わずかに住居の形態や、その広がりについて推測を加えることになろう。

**遺構** 住居地帯は層序の点で明かな如く、一部が攪乱されて全容を明らかとすることはできなかつたが、発掘地域のV-A、VI-A区で遺物がまとまりある状態で出土した。一区画は4m<sup>2</sup>であるので、この遺物の広がりは、V-B、VI-Bにも及び8m<sup>2</sup>の広さをもって広がることになる。住居形態は、平地形態で、柱穴が各所に存在する。特にA-VI区では、1m<sup>2</sup>の焼土が露出された。この焼土は、炉として、仕切りなどが存在しないが、焼土に接して、これを囲むように4個の柱穴が発見されている。焼土の切断調査では、20cmの厚さに焼土が堆積していて、炉址としての状態をあらわしている。柱穴と考えられる穴は、V-AからVI-Aにかけて10個発見されているが、堅穴式住居でないため、住居形式が明確でない。しかし炉址の南側で、III層の落ち込みがみられ、



第5図 桜山遺跡住居地区と炉址

これを追跡したところ、堅穴壁ともみられた。しかし遺跡全体からすると、柱穴は、平地に掘られた形跡が強く、大野川流域の他の段丘にも関連した平地住居群と推定してよい。

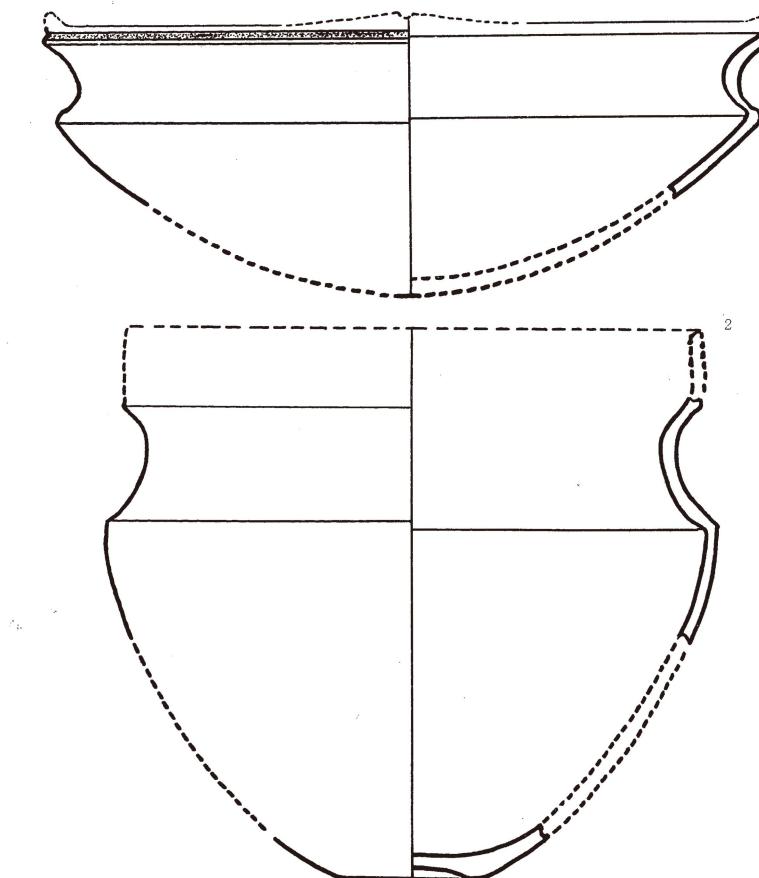
縄文晩期の住居群のうち、やゝ全形を推定し得るものとして、大野郡緒方町大石遺跡がある。ここでは、中央に平たい礎石をおき、その周辺 5 m 平方に遺物の集積があった。この一つの礎石と、遺物の集積状態は各所にみられ、それが群存して集落を形成したものである。したがって大石の一つ一つの住居は、中央の礎石に主柱をたて、これに支柱をもたせかける状態の柱組で、主柱以外は直接屋根を支える長樋の役を果たすものと考えられる。この支柱をうける柱穴はなく、それぞれを束縛して固着したものとみられる。この平地住居は、遺物の包含範囲から径 5 m 位の円形プランの住居と

考えてよい。

桜山遺跡の住居が、以上のような住居址と同じかどうか問題はあるが、すくなくとも、平地住居であったことは事実であるようだ。そして、大石の住居との違いは、中央に礎石をもちいて主柱とするのに対し、中央に炉を設け、この四周に柱穴をたてゝいるところから、煙抜きのある上屋に切妻形の屋根を設けた四柱式、葺おろしの家屋を想定することができる。

IV-Fにおいて掘り込みの溝が注目された。住居址同様III層からの掘り込みで、住居址同時（縄文晚期1式B）の遺構と推定した。この遺構は周辺に攪乱があって追跡困難であったが、後述の横迫遺跡条溝、貯蔵穴群などに類似しているが遺構の推定はむずかしく、重要なものと考えられた。

**遺物** 桜山遺跡出土の遺物は、縄文晚期初期（晚期一式）にあたる。出土遺物は、土器、石器、石製品などである。表土及びII層附近より、後代の遺物が発見されているが、それらは削除して、縄文晚期遺物のみについて、それぞれ出土状況及び特徴を列記する。



第6図 桜山出土土器（晚期1式B）上、浅鉢（黒色研磨）下、深鉢（粗整）



第7図 桜山遺跡出土土器 1～3淺鉢 4～7深鉢 8～9浅鉢底部 10～11深鉢底部

**〔土器〕** 発見された遺物のうち土器は、縄文晚期、黒色研磨土器と通称される薄手、黒色仕上げの土器である。深鉢形土器は口縁部が体部より起立または外反する「タガ」帯を有し、その部位に沈線などの文様が施されることを特徴とした晚期1式（大石式）Bに相当するものである。これら土器類は、深鉢と浅鉢の二つに分類され、前者が粗成、後者が精成研磨土器で、壺や塊などが若干含まれることが、これまでの調査で知らされている。全体としては土器製造の技術、焼成、それから推理される窯など、大陸の竜山文化以降の黒陶に酷似の土器である。

**浅鉢**……全体としてよく研磨され薄手に仕上げられた土器で、黒色研磨土器の典型的土器といえる。焼成はよく、細かく精成された細土を胎土としてもちいている。整成技術をみると、胴部以下と頸部以上とを二つに大別して重ね（輪積）、体部の形成後に、口の部分に粘土紐を巻いて、口縁部を起立させる。したがって口縁部は、起立し、もとの体部上縁から頸部にむかってカーブをえがき、突出した肩部を形成する。胴部は皿状に形成され、底部は丸底または上げ底となる。

口縁部の粘土紐と、体部の縁の間に一条の溝ができるが、これを意識的に沈線文とする。文様とみとめられるものは、口縁部に施文された一条の沈線（第6図1、2）である。口縁部は平縁（2）と、わずかに山形起伏（1）があり、後者には山形起伏部の頂点に凹文（刻文）がみられる。この起伏口縁の浅鉢は、特に研磨が顕著で、晚期初頭（1式A）に多くみられる。

浅鉢形土器は、全体に研磨仕上げがみられるが、この精整研磨の過程で、光沢ある優美なものに仕上がる。薄手精整土器は、全体が黒色に仕上げられているが、これは、焼成に際して、平窯以外の高度な窯の使用が考えられる。高度な窯の存在を考えるもう一つの理由は、土器が精整研磨の薄手の浅鉢と、後述の深鉢の二種類の量産ということで、多分に職業化の傾向をしめしていることからも推察される。こうした浅鉢形土器の総合的観察から、この黒色研磨土器が、大陸半島の土器と深い関係にあることを指摘しておかねばならない。

**深鉢**……深鉢形土器は（第6図2）の如く、肩部が突出するように張り、それから外反する頸部の縁端、体部より起立する「タガ」を附着して口縁部を作る。この口縁部は内行（晚期1式A…大石式）するものと起立、外行（晚期1式B）するものゝ二種類がある。桜山遺跡では、直行または外行するものゝ類で、後者に属する。深鉢には大形（第7図4）と小形（同5、7）があり、前者は粗整、後者は精整である。起立または外行する口縁部には、3～5本の条線文を施して文様とする。胎土は、大形には小石を混入するなど粘土に精成をみないが、小形には細土をもちいる。器壁は浅鉢同様研磨をもちいるが、大形は胎土が荒いために、精整仕上げにはならない。これに対して小形深鉢は浅鉢同様精整のものがある。底部は平底、円盤状粘土のハリ付け（第7図10、11）などがあるが一部には上り底をなす。

縄文晚期の各期に円盤ハリ付けの土器が顕著な特徴とされるが、この種の特徴は、晚期1式B項に

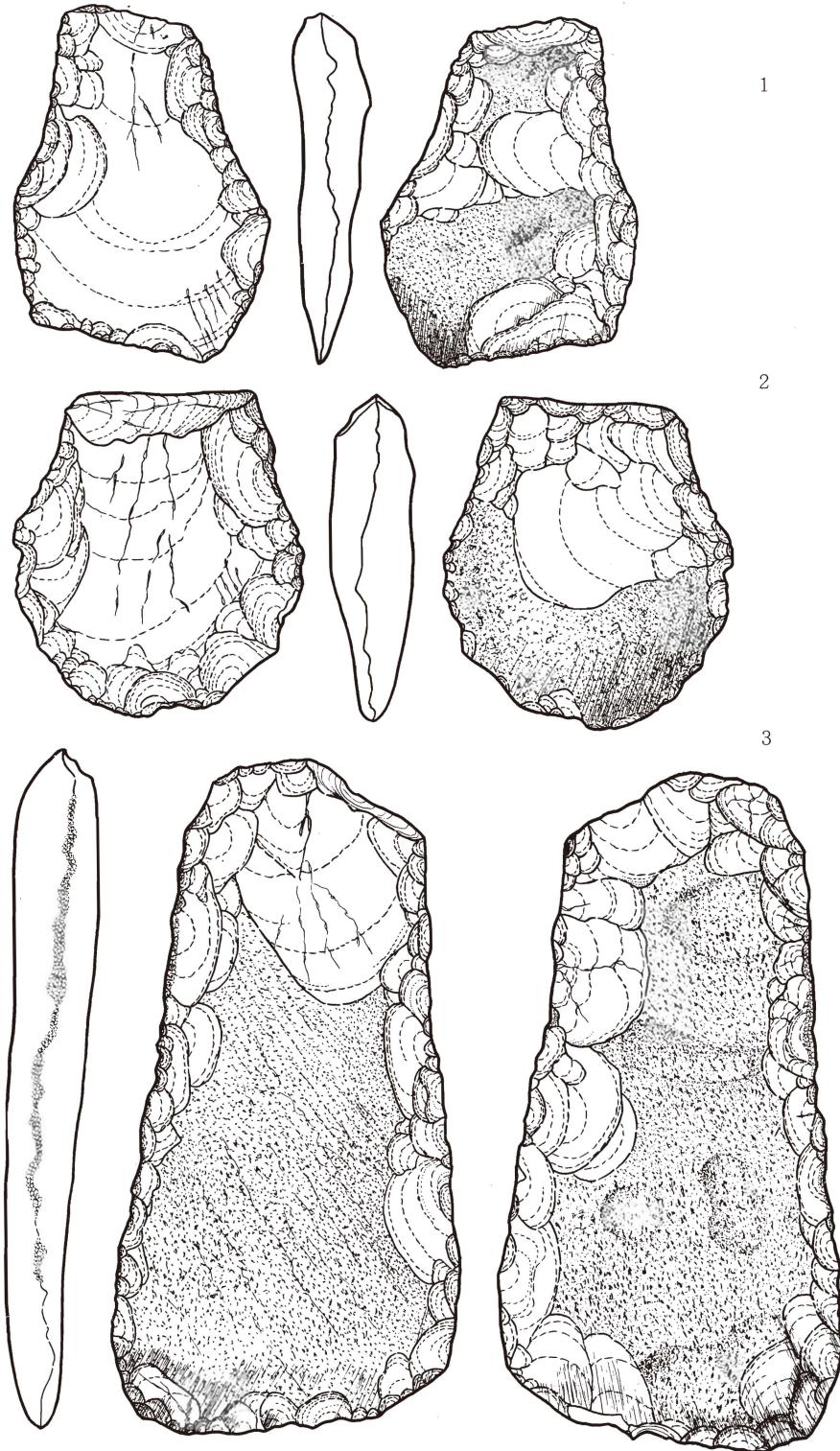
上り底にまざって登場してくるのである。

**壺**……壺形土器は、晩期 1 式 A にわずかながら出現するが、桜山でもその数は少ない。口縁部が極度に外反し、内側が肥厚する特徴（第 7 図 3）をもつが胴部以下が不明である。胎土、焼成など浅鉢形土器に類似して、精整土器であるが、全形態を復原できないので今後の資料にまたねばならない。

**〔石器〕** 縄文晩期の各遺跡から発見される石器のうち、斧形の石器が目立つ。斧には、斧と手斧との二種があるが、前者は斧鉈で用途から、重量を必要とする。これに対して後者は扁平性が要求されるので、当然、明確な区別が必要である。斧鉈には、礫そのものを加工、或いは石核をもちいる。これに対して手斧は、扁平な礫、または、剥片を使用して、これを加工する。したがって斧は打ち割り、手斧は搔き、削るときにもちいるのであるから、この両者を斧という名でよぶのは問題がある。

**扁平石斧**……九州などの縄文晩期の各遺跡から発見される石斧は、小量の斧の他に、多量の手斧の類がある。そして一遺跡から出土する量は他の石器に比して圧倒的に多く、狩猟具である石鎌の後退が目立つ。狩猟具たる石鎌に対して、手斧は農耕具であると考えられ、このことは大石遺跡においても実証された。桜山遺跡の扁平石器（斧）について分類し整理してみよう。桜山遺跡出土の右斧は 28 個出土し、その計測は次表の如くである。第 8 図 3 と第 9 図 5 は撥形の扁平石斧で、3 は節理による扁平な石材を、5 は石核から縦剥ぎによっておとされた扁平な剥片を利用し周辺を加工して刃部を片刃に整形する。刃部は加工部が磨耗しているので、この部位を使用したものと推定される。また着柄の際の磨耗が、側面上方に顕著であるので、柄に着装されたことが知られる。これらは鋤として使用されたのであろう。同様に、鋤と思われるものに第 8 図 1、2 がある。縦剥による扁平石器で、分銅形に下方の巾が広い。刃部は片面加工(2)で、両者とも礫面を残す。この刃部片方の礫面に使用による擦過痕が斜行する。着柄による磨耗が刃部と反対の側面にみられる。扁平石器のうち土掘りの鋤と考えられるのが、第 9 図 4～6、第 10 図 9～14 である。全体的にみて、片方に礫面を残すことがあって、石核の大きさが推定される。形態的には、13 と 14 が共に分銅形をなし、11、12 が短冊形をなす。5、9 は撥形で、形態的に数種類に分類される。いづれも刃部は使用により擦痕が残されている。特に 4 の扁平石器は、両面が大きく剥離され、この部位に残された擦痕は著しい。着柄は、突棒状の先端に着装されたとみられ、刃部と反対の先端近くの両面に磨耗部が観察された。したがって、鋤形の曲柄に対し、鋤形石器は突棒形で垂直に着装される。

**石庖丁**……すでに使用痕の研究から穂摘具と考えられる横長の石庖丁形石器は、縄文後期の各時期において多量発見される。扁平（厚さ 1.3cm 位）の剥片を加工し半月形に整形する。刃部は片方に小剥離をもって調整して形成する。このような扁平石片全体から半月形加工（第 11 図 1、2）したものと、扁平加工の半折不定形のサイドブレード（11 図 3～5）がある。石器は安山岩と粘板岩



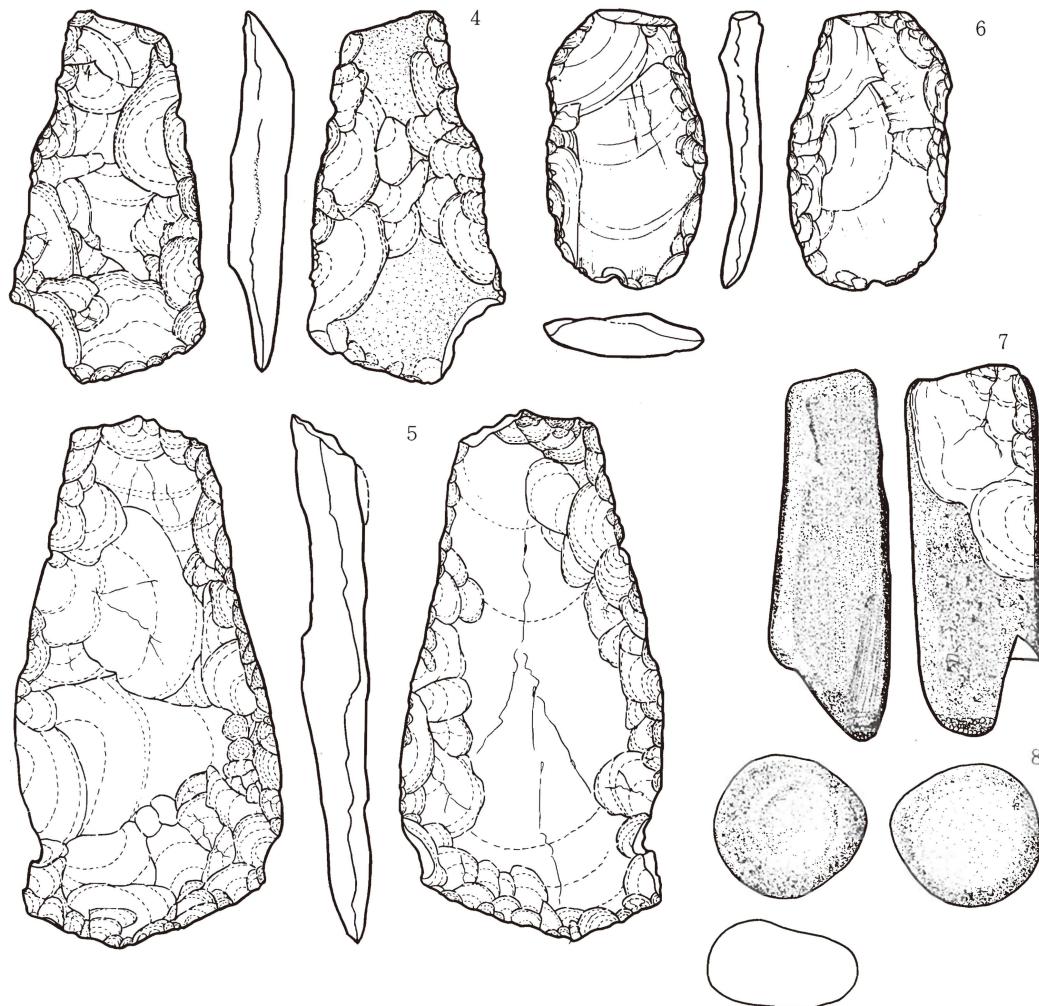
第8図 桜山出土石器（耕具）  
(大きさ次表実測番号参照)

(4)がある。これらの扁平石庖丁は普通横剥ぎの剥片を使用するが、稀に板状節理による扁平礫を使用する場合もある。

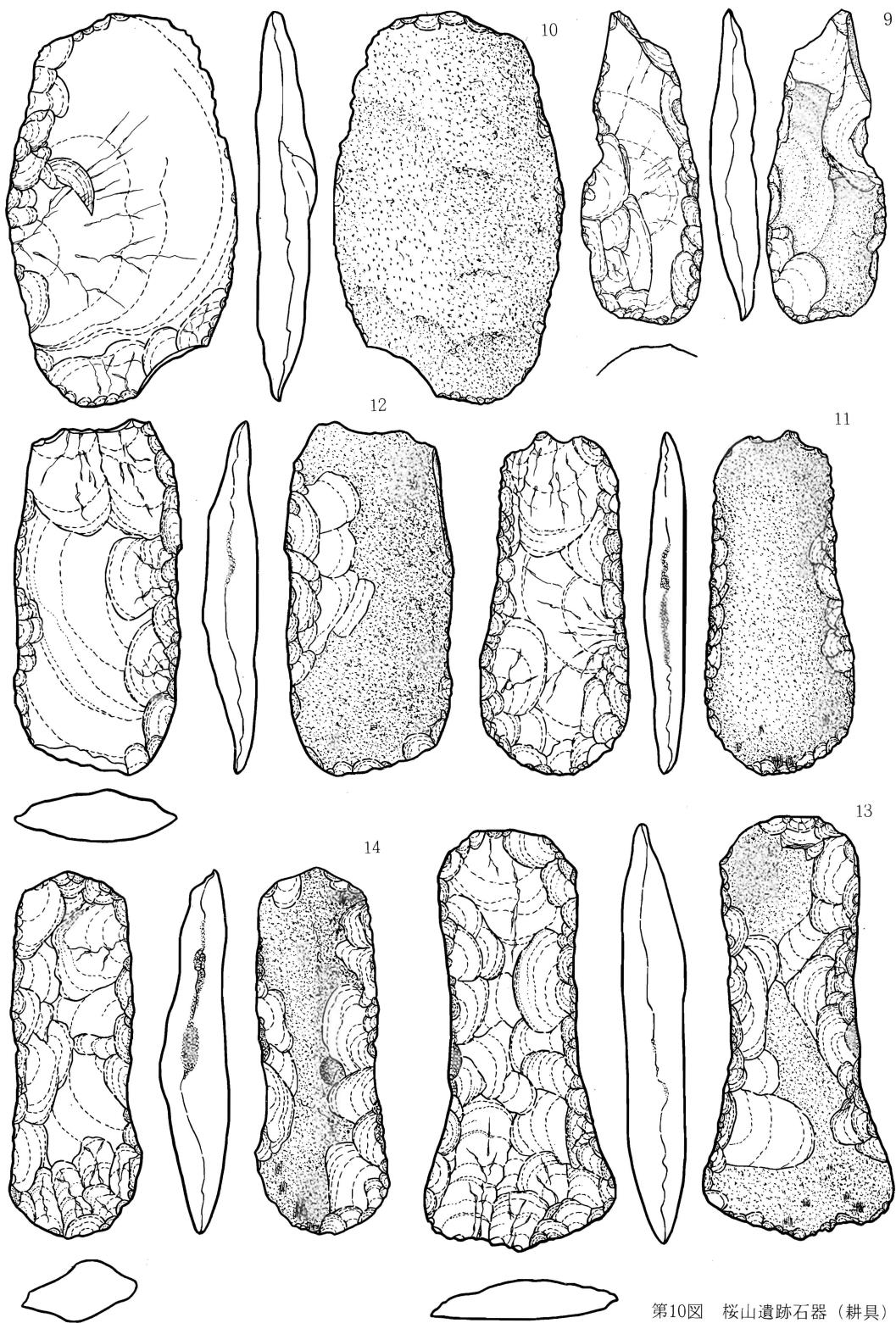
### 扁 平 石 斧 の 計 測 値

摘要 No.	全長mm	最大巾	最大厚	重量g	反り率	打剥	刃部	厚幅率	実測 番号	用途	石材
1	238	122	28	1188	0.190	縦理	片	1.0:2.7	3	鋤	安山岩
2			24		"	"				"	
3	(134+)	60	22	150	0.138	縦剥	"	1.0:2.7			"
4	155	68	20	214	0.109	"	"		5		"
5	(125+)	(65+)	20	192	0.170	"	"				"
6	185	90	23	410	0.140	"	"		6		"
7	107	63	17	122	0.360	"	"				"
8	139	61	17	1167	0.173	横剥	"	1.0:3.6			"
9		(55+)	11		"						"
10	(115?)	57	25		"	"					"
11		48	21		"						"
12		(53)	20		"						"
13		(69)	25		"						"
14	117	103	30	442	0.246	横?	"		2		"
15	125	90	26	259	0.196	縦?			1		"
16	172	78	26	379	0.136	横剥	両	1.0:3.0	13		"
17			21		"						"
18	96	56	13	83	0.278	"	片		4		フォルンエルス
19	149	53	28	231	0.205	"	両	1.0:1.9	14		安山岩
20	137	60	22	208	0.293	"	"	1.0:1.9			"
21		57	16		"			1.0:2.7			"
22		55	17		"						"
23	143	67	23	242	0.242	"	片	1.0:2.9	12		"
24	160	78	25	278	0.222	"	"	1.0:3.1			"
25					"						"
26		54	21		"	"	?				"
27	158	94	23	340	0.281	縦剥	片	1.0:4.1	1	鋤	"
28	128	48	19	114	0.103	"	"	1.0:3.1	2	"	"

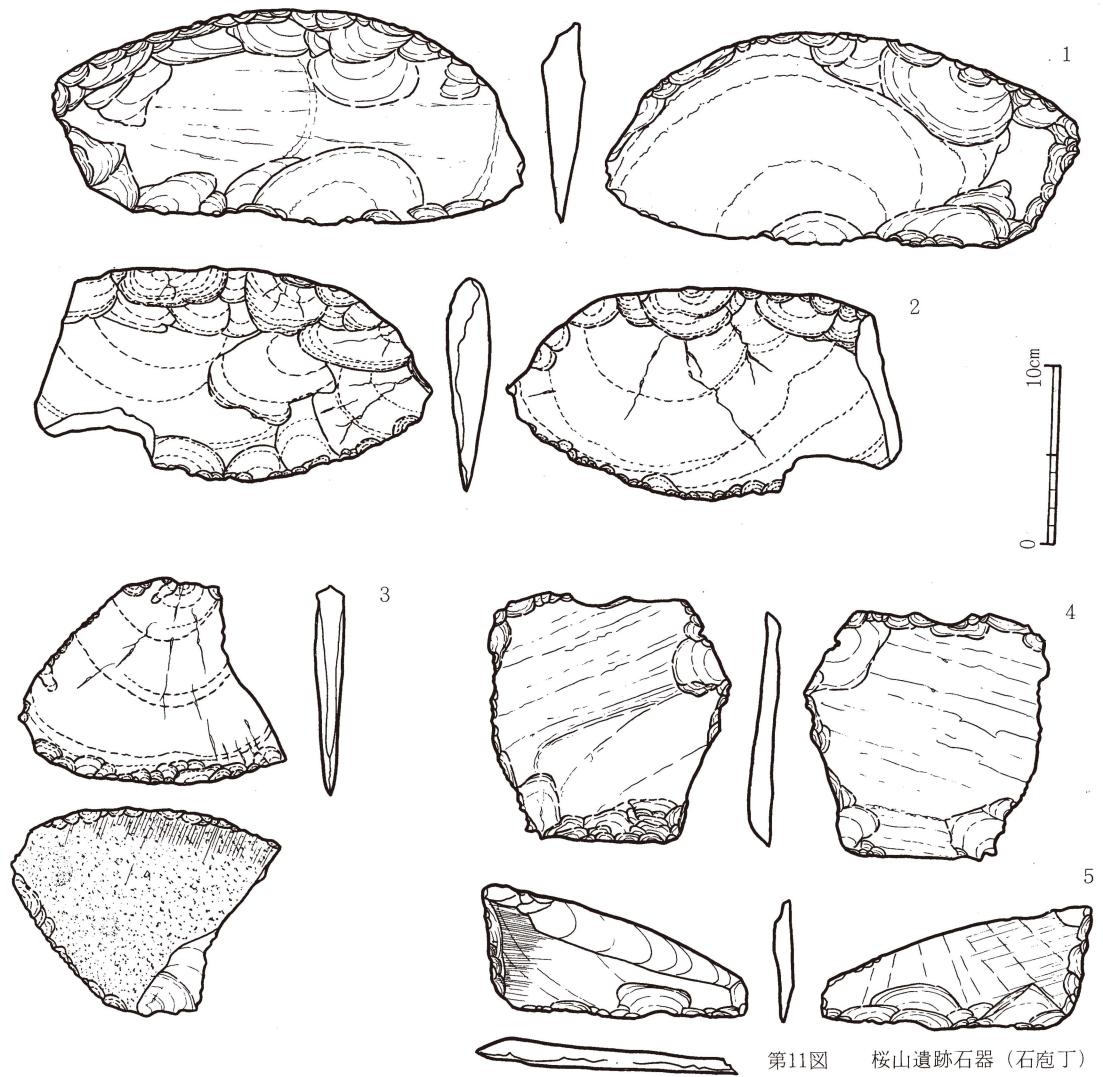
**扁平石器**、**撥器**、**斧**、**石庖丁形**の加工……扁平石器の製作にあたって、打撃、剥離などの整形技術から、その製作を考えることができる。原石の占定、石核調整（第一階程）、剥片剥離一打面調整（第二階程）、そして石器成形剥離（第三階程）と進む、この整作過程、第一階程では離片は大きい。第二過程での剥片は大、中程度、第三階程のリタッチにおいてはチップは小、又は極少となる。したがって、桜山遺跡では、多数の石片を調査することによって、扁平石器の製作過程を具体的に知ることが可能であった。即ち石器の製作工程の復原が、剥離破片によって細かく調査したうえで正しくおこなうことができる。この剥離破片による製作工程の復原観察は、多数の剥離破片によることで相当精度な考察が可能となる。



第9図 桜山遺跡出土石器（耕具と擦り石）



第10図 桜山遺跡石器（耕具）

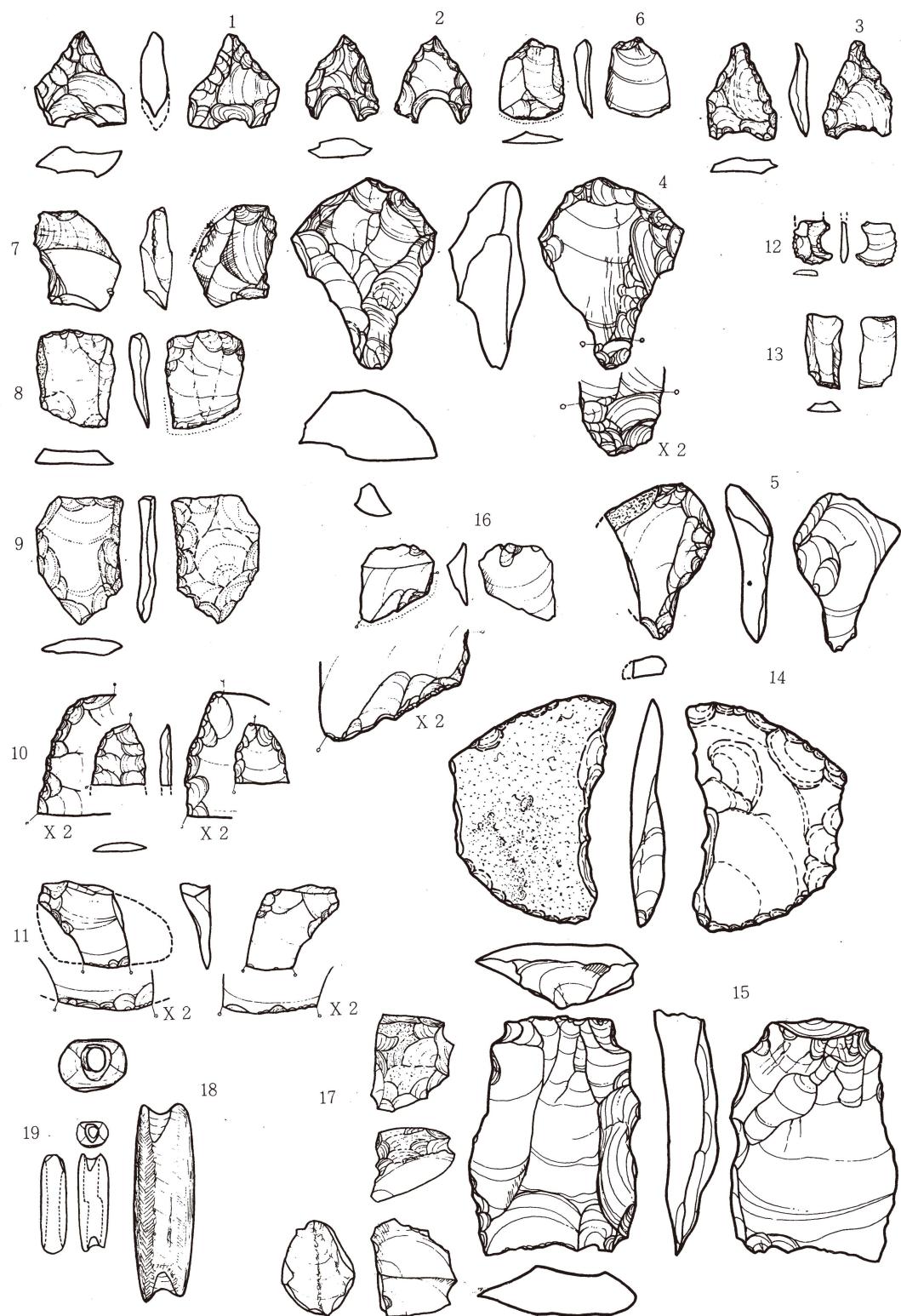


第11図 桜山遺跡石器（石庖丁）

**すり石**……すり石棒状（第9図7）と円盤状（同8）がある。前者は長13.4cm径4.2cm（最大）の断面不定形の棒状で、全体に磨耗のあとがよくみられる。このすり石は大石遺跡において表面平らな石臼とともに発見されたものと酷似する。穀類などをする道具であるとみられる。円盤状の小形すり石は、径5cm位の扁杏形で厚さ3cmを有する。

**剥片石器**……Ⅲ層出土の剥片石器は、定形、不定形を合せて15点の出土をみた。材質は黒曜石が多く、硅岩などがこれに次ぐ。

**石鎌**……3点の出土をみた。石質は黒曜石（原産阿蘇第12図1、姫島同2）と安山岩（同3）で、原材が3つとも異なる点が注目される。1、2は基部の抉り込み強く、この部位は押圧剥離で角度が深



第12図 桜山遺跡出土剥片石器

い。1、2ともに6面の主要剥離面を残している。3は所謂駒形鋤に属し、基部にわずかの反りがみられる。a面には大きく前段の剥離がみられ、b面に主要剥離がみられる。周辺の加工は錯交剥離をみせ、細かい部分と雑な部分がある。重量 1.4g である。

**石錐**……III層またはVI層上縁の出土で、いづれも先端の一部を細かに加工調整した錐形石器である。大形の石錐（第12図4）は18.5gで、a面は粗く大きな剥離を残している。そして先端部から打たれた大きな2つの剥離は、B面の主要剥離面の基調と呼応して断面三角形をなしている。また同図5は、a面右側に形成され細まかな剥離面があり、b面は一面に主剥離面が残されている。材質は両者とも硅岩を使用している。

**不定形石器**……剥片石器のうち、形態が不定形をなすものは出土数が多い。これらのうち縦長の剥片の先端に刃部をもつもの（第12図6、11、12）、長軸の側辺に刃部をもつもの（同図7、8、9、10、15、16）などがある。前者はend-scraper、後者はside-scraperであろう。石質はおおむね黒曜石であり、中に硅岩を使用する。

**残核**……残核1が出土している。剥離面を観察する限り、定形的な剥片を得られるとは考えられない。剥離作業の終了時の残核の高さは20mmで、打面は22×17mmで、20mm前後の剥片と考えてよい。姫島産の黒曜石を使用し、重量 6.0g、高20mm、巾20×17mmである。（第12図17）

**管玉**……1層から出土した遺物の中に硬玉の管玉が2点がある。縄文晚期の遺物包含層はIII層であるので、二次的散布となる。しかし、この2点の管玉は、大石遺跡など、九州各地の縄文後晩期における出土玉と大同小異、III層より遊離したものと推定できる。18は、長径 4cm 巾最大 1.4cm、19は長径 2.1cm、巾 7mm で、穿孔は両側よりおこなわれ中央で貫いているが、交互穿孔は若干ずれて貫通しているなど技術的には未熟である。

## 小結

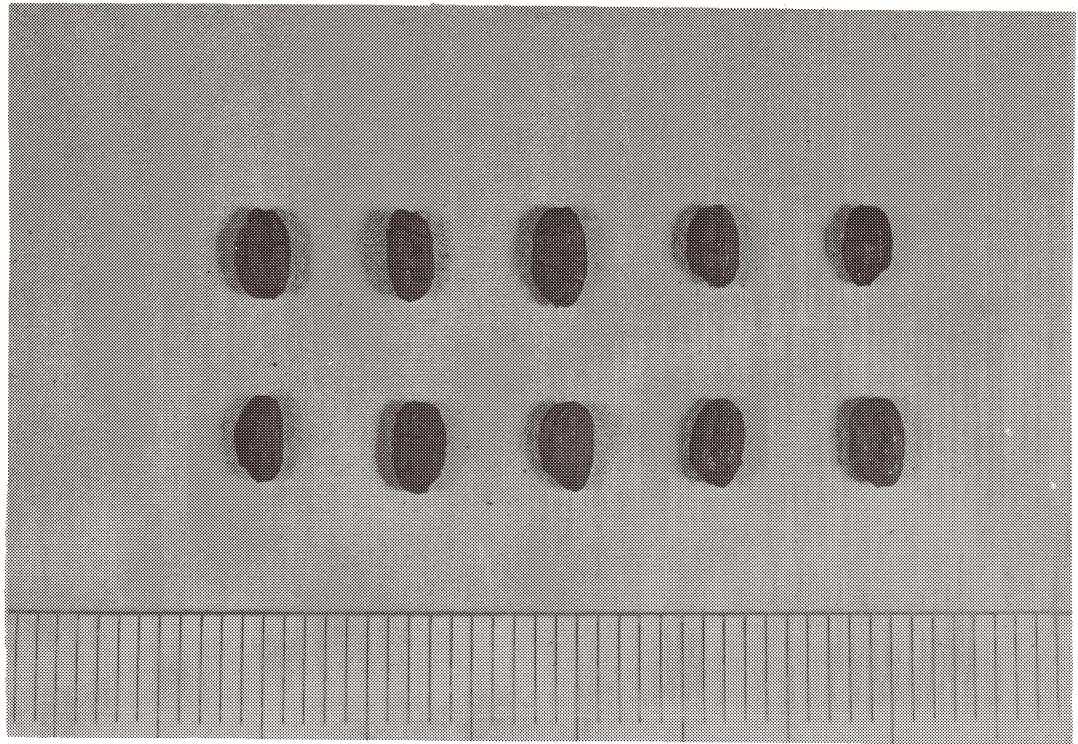
桜山遺跡では住居形式がほゞ確認され、そこから出土する土器は晩期特有の黒色研磨土器を主体としている。当時の生産技術を知る手掛りとして、扁平石器が発見される。土を搔く手斧は柄に着装されて鋤や鍬として使用され、横剥のそれは使用痕などから、手持ちの石庖丁と推察される。こうして集落の一部と生産技術の重要な問題が考察され、土器が大陸半島との関係を強調される研磨土器であると併せて、農耕論を強調することができた。しかし、ここでも集落全体の状態、そして栽培される植物についての具体的資料、育種の問題は、解決されていない。この点が今後の問題となろう。阿蘇山帶の高地での農耕を推定するとき、大陸黄河などの流域の黄土地帯と同様アワ、ヒエの可能性は強い。

## 4 恵 良 原 遺 跡

大分県直入郡荻町恵良原遺跡は、荻台地の東端近く、標高 478m に位置する。遺跡は、平坦な畠地の地下げ作業中に発見された貯蔵穴で、1970年11月地元の山村高啓によって報告された。畠地の地下げ中に黄色土層に切り込まれた黒色土のつまつた豊穴が発見され、その中から多量の炭化コメが発見された。この炭化米は、九州大学農学部片山平教授及び大阪府立大学松本豪氏によって計測され、日本型のコメという結果がでた。

豊穴中において発見された土器は、縄文晩期 II～III式と推定され、他に混入遺物が存在しないといわれた。また同時に附近から表面採集された土器、石器は間違いなく縄文晩期の遺物である。こうした周辺の状況から考えて、この炭化コメを縄文晩期のものと推定することは至極く当然である。また、測定値は長巾率が1.70で平均長が4.19mm 小さく、陸稻の可能性もある。

さて、1971年5月、恵良原遺跡の探索調査と、1970年発見当時の状況追跡調査で、附近に弥生式中期の遺物の散布することが明かとなった。更に発見当時の豊穴の切口は、桜山遺跡などのIII層（縄



第13図 恵良原遺跡出土炭化コメ

文晚期生活層）と関係ある土層であるかどうか問題となった。ここで周辺の状況は、弥生、縄文晚期の二者が存在することが確実とされ、出土コメの時代決定にも問題がおこった。わずかに縄文晚期が有利だとする理由に、竪穴内部出土の縄文土器があることである。この炭化コメの出土について、時代決定は非常に問題であるので、形態計測のほかに放射性炭素( $C_{14}$ )測定をすることにし、炭化コメを慶應大学江坂輝弥教授に依頼して、東京大学において測定することにした。最終的な時代決定は $C_{14}$ の測定をまつことにしたい。

## 5 横迫遺跡

大分県直入郡荻町横迫遺跡は、1967年に試掘し、1971年10月調査を実施した。桜山と恵良原の中間、標高 510m の台地に位置し、南側には岩戸川が西から東に流れ、深い谷を形成する。遺跡の立地条件としては、桜山遺跡とよく似ている。この二つの主要な遺跡のほかにも岩戸川にそった荻台地南縁には遺跡が多い。



第14図 横迫遺跡全図

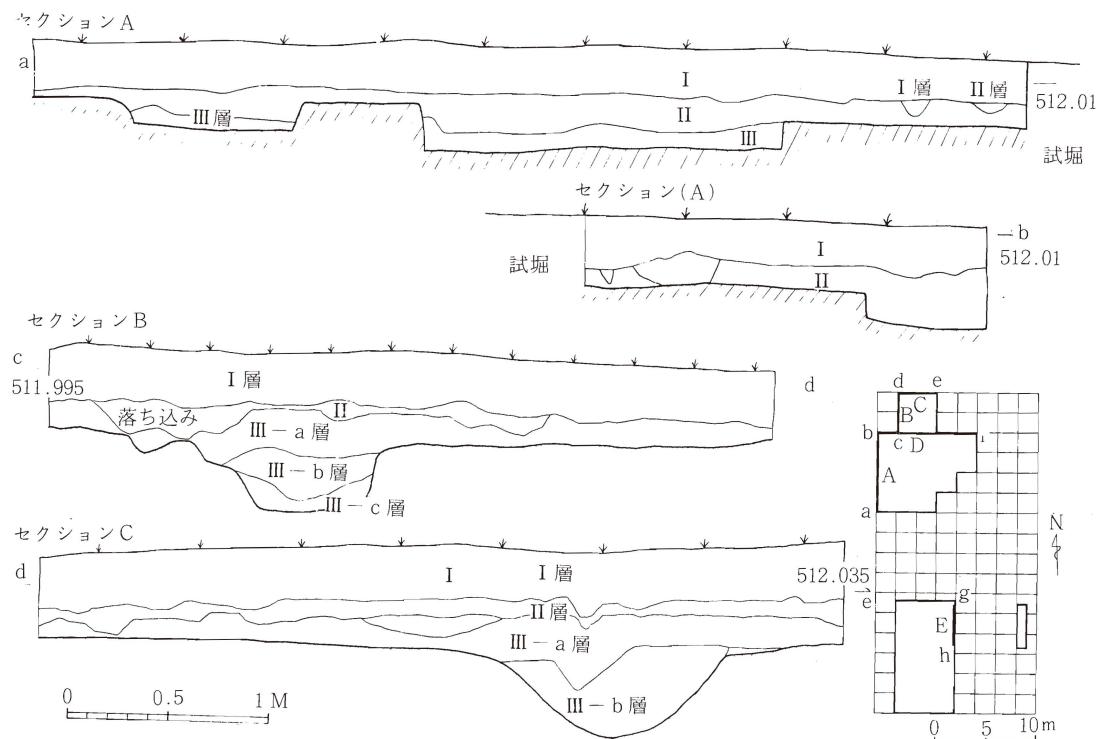
遺跡は岩戸川に沿った台地南縁の平坦な地域一帯（約 200m 平方と推定）に存在するとみられる。台地南縁の雑木林（ナラ樹林）を除き、調査区を設定し、試掘ヶ所を中心に、二つの地点で調査を実施した。

A 調査区、1～5、11～15、21～24、31～33、それに 1～5 に接して 212～213、202～203 の各耕目を発掘。それぞれの耕は 4 m 平方である。

B 調査区、82～84、92～94、102～104、112～114、122～124、132～134 の各区の調査を実施、この B 区に接して 88、98、108 の C 調査区を追加して調査を進めた。A 調査区の北側に三つの試掘溝を設けて土層の調査をして、台地全体の遺跡の広がりを検討した。

**層序**〔第15図〕……横迫遺跡では、遺構として住居地帯と、それを取り巻く数条の溝が発見され、弥生式農耕集落に関連するものと推定されて、これが環溝または条溝であることは確実である。この集落を構成する遺構を検討するために溝を含めて層序研究は重要であった。層序は A、B 調査区で合計 A～E 迄の層序検討をおこなった。

I 層……表土、柔かい黒色土で、耕土の変質である。やゝ褐色をおび、水平堆積で、20cm～25cm の厚さである。



第15図 横迫遺跡調査区と断面

II層……漆黒色土層で、I層同様黒色灰土の堆積である。この層は一部が攪乱されて、先史遺物を散布する。この灰層は、20cmから10cm位の厚さで、表面に起伏があるが、堆積、削除（自然）をくりかえし、弥生式中期遺物はII層の下部より出土する。

III層……全体が褐色で、各部に黄色いパミスを含む。平均20cmの堆積で、縄文晚期の遺跡は、このパミスを含む層の中位に相当する。したがってIII層は肉眼観察で識別困難であるが、上下二つに分けるべきであろう。上部は比較的硬く、下部は柔かい。桜山のIII層とIV層がこれにあたるようである。

IV層……褐色の柔かい土層で、遺物を含まない。桜山のIV層は、このIV層と上位III層下部を含む。約40cmの堆積である。

V層……オレンヂ色の荒粒子土壤で、層の堆積厚は調査していないのでわからない。阿蘇東方台地一帯では、オレンヂ色の火山灰の堆積は場所によって異なるが、V層下に黒色土層があって、縄文早期の遺物を包含する。

III層の中位に遺物の散布がみられ、柱穴や溝など遺構が確認された。溝はIII層中位から掘られ、その切口が弥生式遺物の散布するII層下位に及ぼすことが確認された。そして溝に接して発見された土器や石片は、すべて縄文晚期1式Bの時期に比定できる。

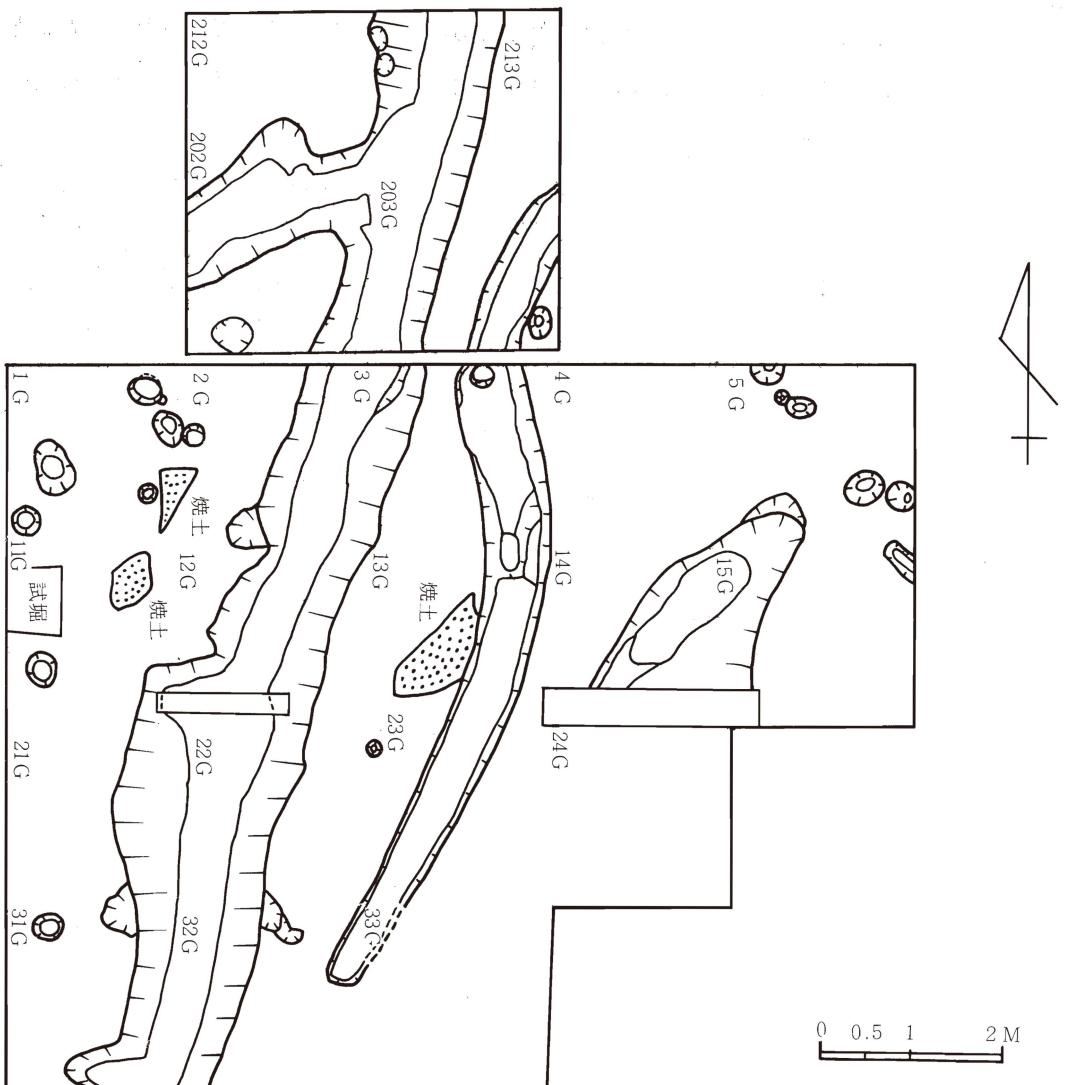
溝が縄文晚期につくられるるとすると、この条溝は住居地帯を走ることになる。条溝の周辺の柱穴や焼け土（炉址と推定）など、溝と集落の関係を明らかにしなければならない。

遺構……横迫遺跡では、縄文晚期1式Bの時期に相当する集落の状態が明かにされたことで、調査の目的は達成された。住居地帯を走る溝は、南北に一本(a)、それと交叉するように広い溝が(b)で東西に走る。またa溝から西に向う細いc溝があって、条溝の数が多い。

a溝は巾2m、深さ50cm、b溝は巾3m、深さ60cm、c溝は巾90cm、深さ30cmである。この溝のうちb溝はV層のオレンヂ色の土層まで達し、その巾も大きく、底が平らに作られていて、主要な溝と推理することができる。この東西のb溝は、おそらく集落の外側を走り、集落の区画を設定するものではなかろうか。a溝はU字溝に近い断面をもち、弥生中期の溝の性質と似ている。このa溝の左右は、柱穴などが密集し、（焼土・炉址）が各所に存在して、平地構造の住居郡が存在したことを知る。

c溝はa溝より分離し東に延びる条溝で、b溝同様底部が平らに作られている。このc溝と、南北に走るa溝の内側に、多量の遺物が含まれ、柱穴や焼土が多く集まるので、溝によって仕切られた集落の一つの中央は、a溝の西側、c溝の南に存在するものと推定される。

a溝の東に、a溝と併行して走る条溝は、後世の溝で、この上位は層の攪乱がみられた。またこ

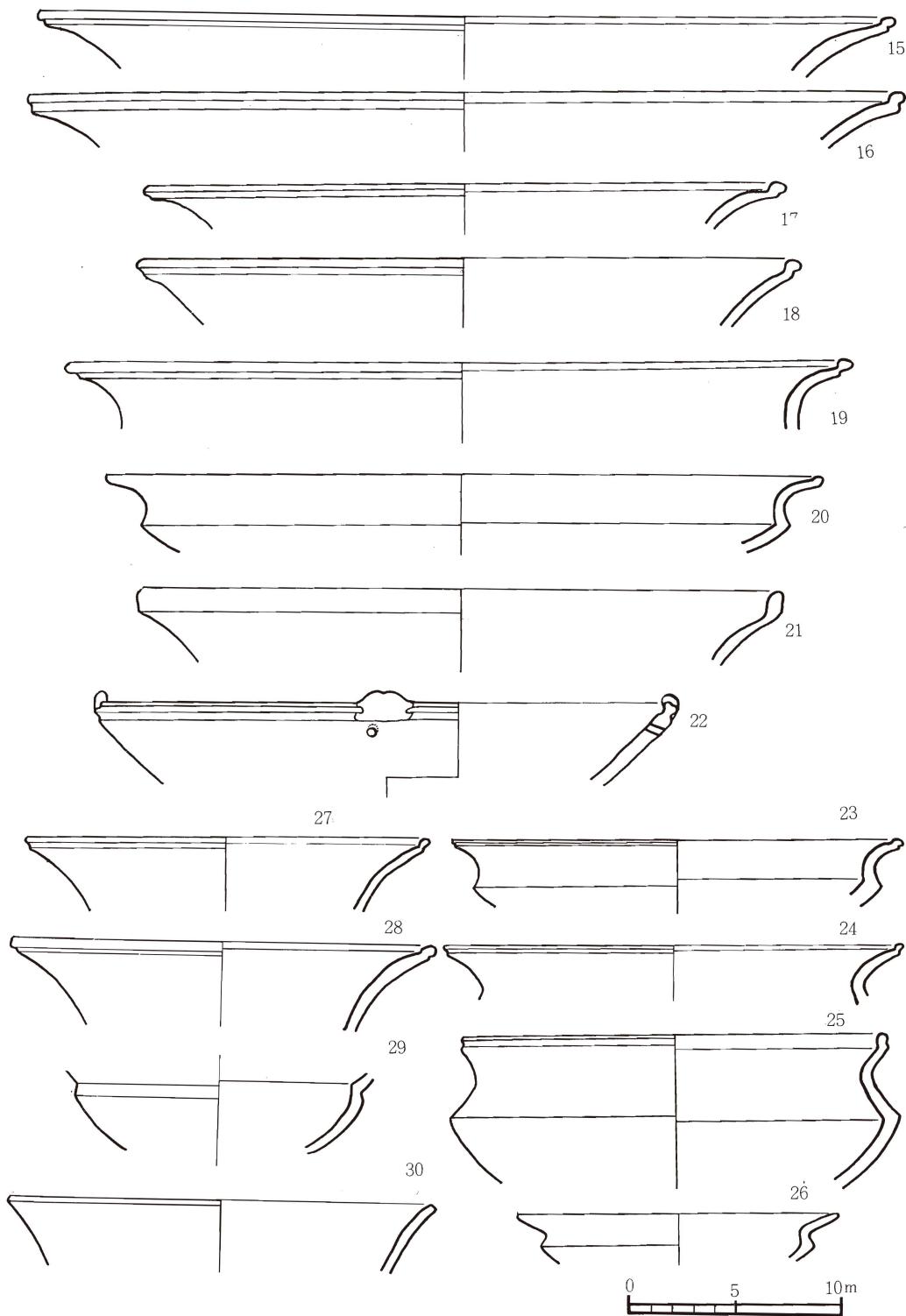


第16図 A地区住居地帯条溝

の攪乱溝の東に接して発見された竪穴は、貯蔵穴と推定された。

b溝の両側は後世の削平があって住居地帯が消失しているが、溝に接して焼土（炉）や柱穴が残されていた。特にこの位置では植物などの種子の炭化物が検出（水洗方式）され、それらは目下東京大学農学部で調査されている。

横迫遺跡の住居址は、大野川流域の他の遺跡同様、平地住居と推定される。それら平地住居は、あるまとまりある集団となり、それが溝によって他の集団と仕切られるようである。このような集団を明確にあらわす溝をもつ集落は、弥生式時代の農耕社会にみられ、その小集団を「単位集団」という名でよんでいる。集落の構造が、血縁的集合の単位から、これを結合するようになれば最早確実に農耕経営による生産がおこなわれたとみてよい。



第17図 土器（浅鉢）

大石遺跡における集落と集会所と推定される大堅穴の存在とともに、横迫遺跡の条溝によって仕切られた集落は、縄文農耕論の注目すべき発見の一つであった。標高 500m を越す高台地にあっては穀類栽培においても作物に制限がある。大陸黄土地帯や朝鮮半島における雑穀類栽培のために発見された農耕用の石器と同じものが発見されたということも、農耕を裏付けることになろうが、それにもまして、条溝によって仕切られ、単位集団をおもわせる集落の発見は、縄文農耕を肯定させる大きな問題提起となろう。

**遺物**……横迫遺跡発見の遺物は土器、石器が主である。土器は、桜山遺跡同様、黒色研磨土器で、縄文晩期 I 式 B に属する。形態的には深鉢形土器と浅鉢形に大別され、底部に円盤形土製品をハリ付ける技法が目立つことから、晩期 II 式えの移頃と考えることができる。したがって土器の形式からすれば、桜山一横迫に推移する。

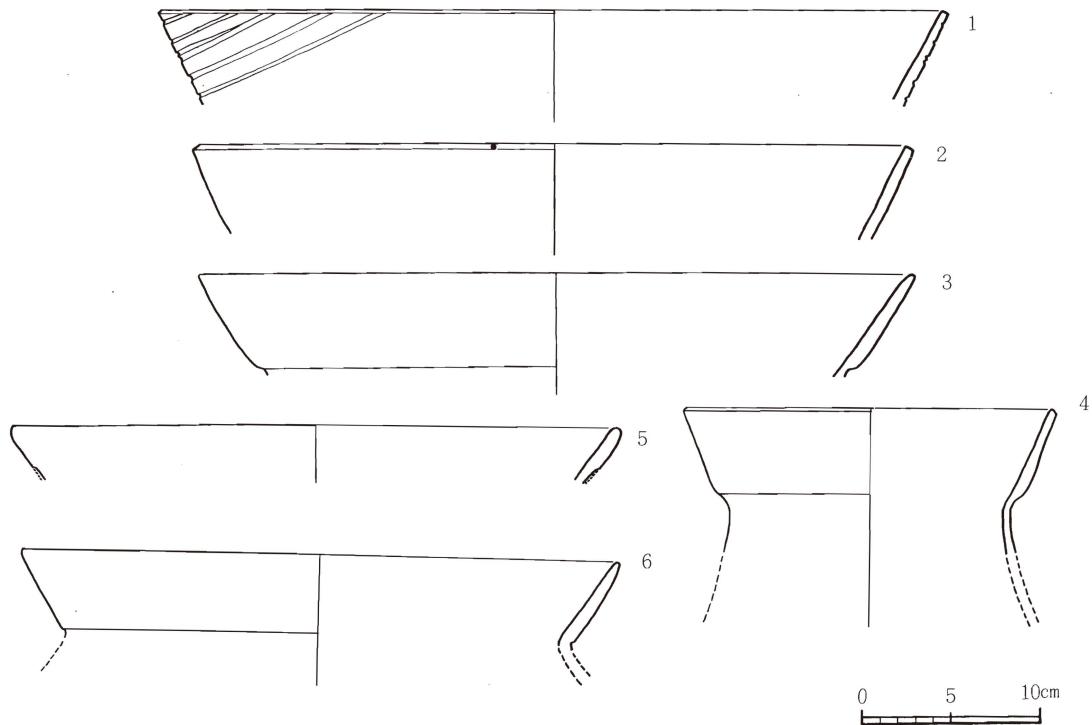
**浅鉢**……浅鉢形土器は一般に器壁が薄く、黒色の精整研磨土器の一群である。体部縁端に粘土の紐を巻いて口縁部とする。したがって、口縁部には、体部縁端との内、外間に溝ができ、これを装飾化して外部に凹線文を施文する。肩は極端に張り、その部位が直角に近い角度で反転して下腹部にいたる。底部は、上り底か丸底で、円盤ハリ付底はみられない。

浅鉢形土器で肩部から口縁部までの間が長く、土器全体で最大径が口縁部にあるもの（第17図15～18、28～30）と、頸部が比較的短かく、肩部の反転が 90° 以上（20、23）になるものとが大部分をしめる。これに対して、口縁部の外傾が少く、起立に近いものは最大径が肩部（25）にあり、深鉢に近い形態となる。また、口縁部に粘土紐の「タガ」をもたない浅鉢（26、30）も、出土量で 1% 以内である。

浅鉢形土器は全体として端正で、薄手黒色の光沢ある仕上がりをみせる。文様も、口縁部に一条の凹線文、（沈線）を施すのみであるが、（22）の如く、ハリ付けによって山形に波状部をもつものが稀に存在する。全体としては製作技術のうえで統一されたものとして一括してよい。これを類別に分類する必要がないほどに統一的形態である。

**深鉢**……口径42cm（最大第18図1）から25cm（最少、同図4）の間、大小様々の土器があり、口縁部は、体部上縁に附着された「タガ」を外傾させて、外開きにしたもので、このタガ状の部位に凹線文または沈線文を数条にわたって施文することがある。横迫遺跡では、口縁部に条線を施したもののが少く、大部分は、無文で放置している。比較的長い口縁部は外に向うため、頸部がしまる。胴部は中程で誇張し、下腹部は若干丸味をもって底部に移項する。底部は、丸底に整形し、その外縁を円盤でハリ付ける。

胎土は小石を混ずることもあって荒い。焼成は比較的良好で、しまりある土器に仕上げられる。器

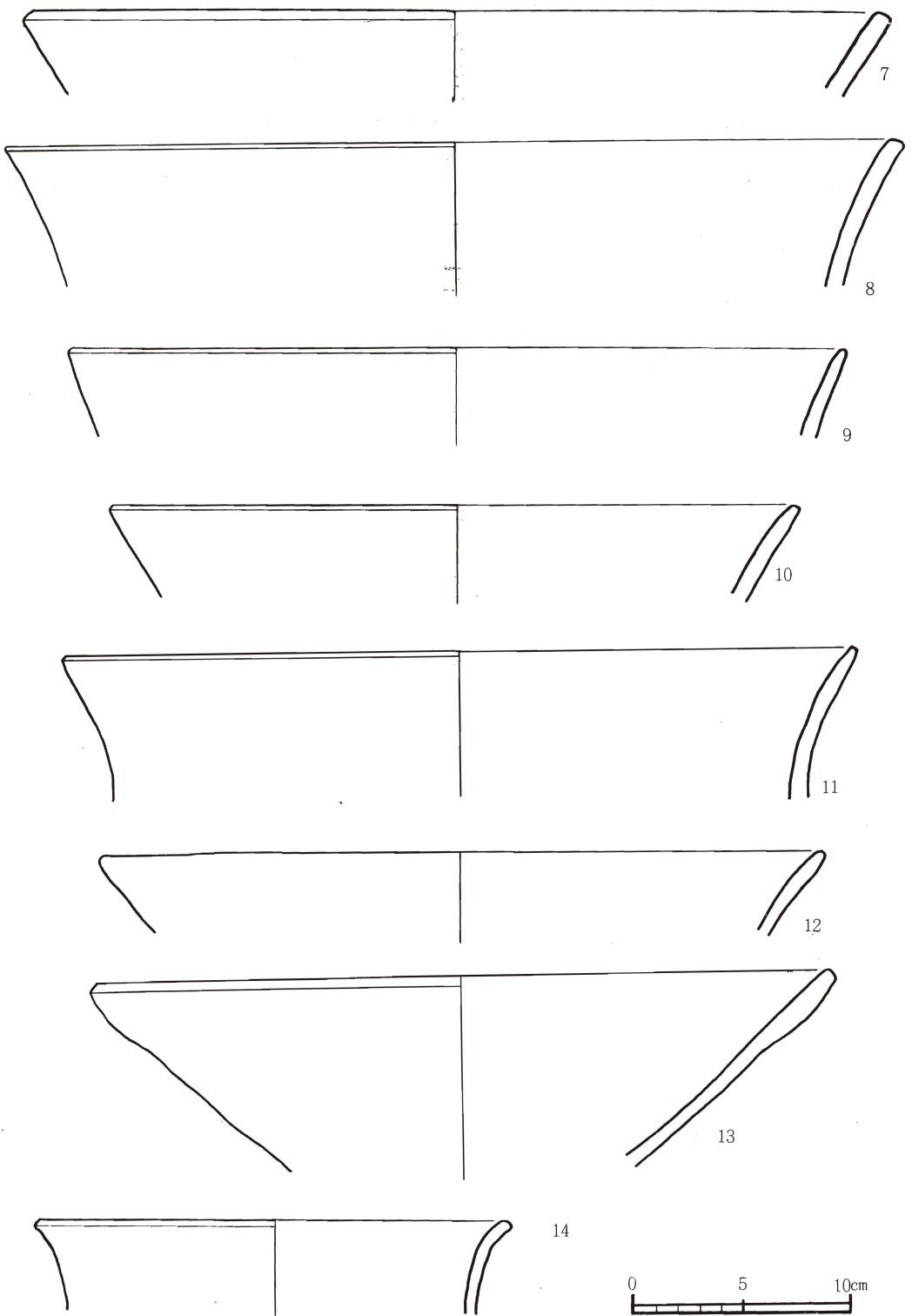


第18図 土器（深鉢）

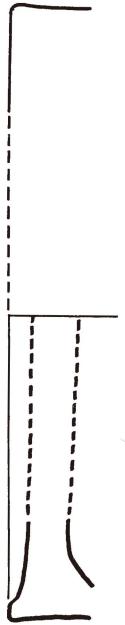
壁には条痕がみられるが、大部分は研磨をみる。研磨の状態によって精整と粗整に分けられるが、8割迄が粗整である。

また口縁部そとに向い、肩の張った深鉢がある。口縁部が直線的に外に向うもの（第19図7、9、10）、外に反するもの（8、11、14）など、端正な深鉢がみられる。これらは、肩の張った屈析部から下腹部に移項する形式で、後期御領式土器の深鉢形の影響とみる。擂鉢形（13）をした精整土器がわずかに一点発見されている。

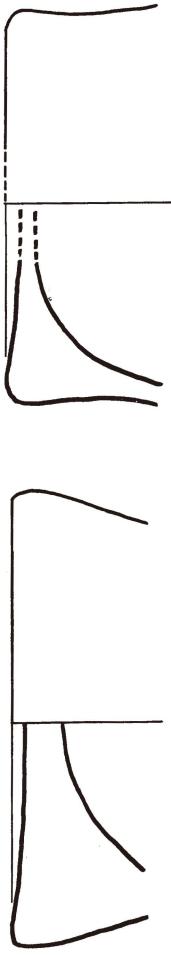
口縁部外傾し肩部張り、その部位で反転屈析する深鉢形は、晩期III式の刻目凸帶文土器に及び、縄文晩期の一特徴といえる。



第19図 土器(鉢形)



37



38



第20図

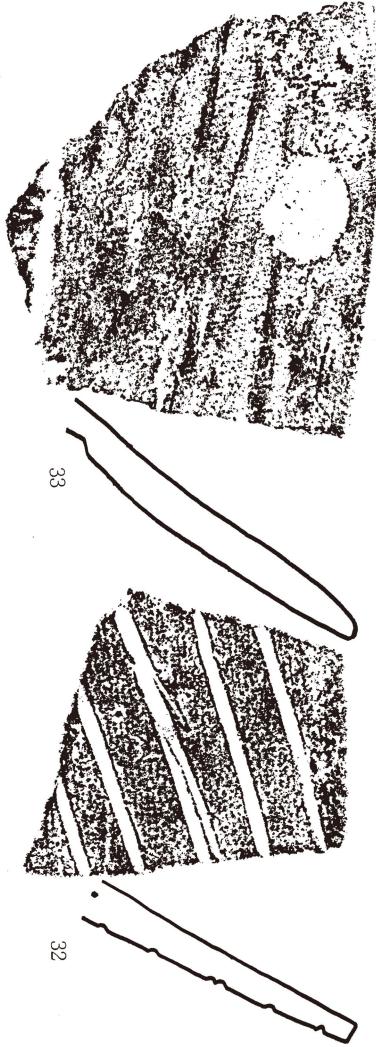
土 器 (深鉢と底部)



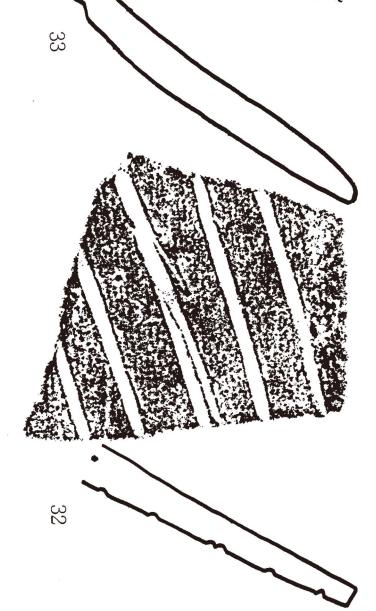
35



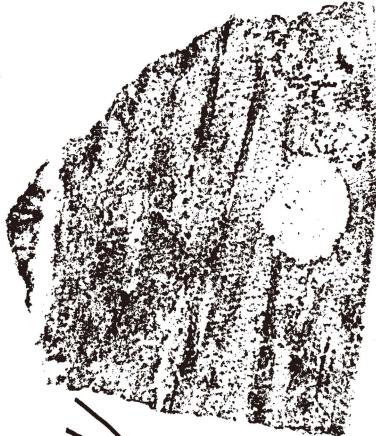
36



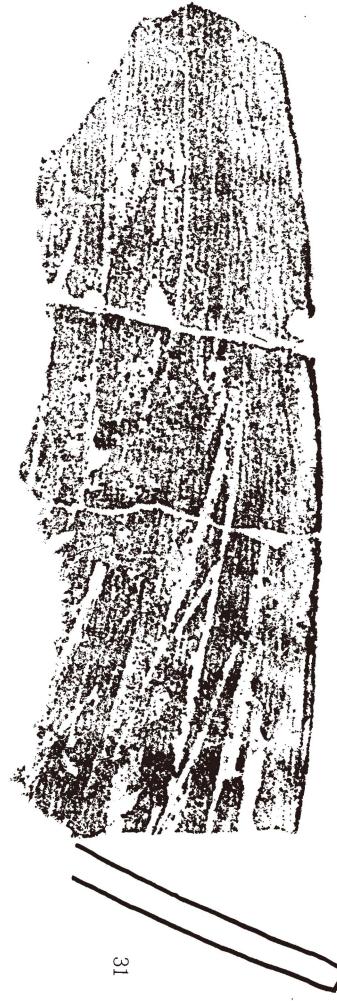
32



34



33



31



30

**石器**……石器の出土は扁平石器（石鍬、石庖丁形）の他石鏃、尖頭器、搔器などの剥片石器に分類される。全体的にみて扁平石器の量産に対して石鍬の後退が目立つ。この傾向は、大石遺跡、桜山遺跡など、大野川流域の有名な縄文晩期遺跡全体としてみられる傾向である。石鍬の後退は何を意味するのであろうか。

**扁平石器**……扁平石器のうち搔器と考えられるものは石鍬的なものと推定される。この石鍬と考えられる石器は二つの種類に分類される。長楕円形をした石器（第21図1、7）と、撥形に下部が開くもの（同2～6）に分類される。長楕円形をなすものは、長さ18cm、巾5cmで、安山岩の扁平な礫を使用し、周辺を細かく加工して整形している。使用痕は先端附近にみられ、擦痕は斜めにみられる。7は1同様の楕円形扁平石器で、ほど中央で折れて先端部を残している。先端は刃部調整部の剥離面が使用によってつぶれ、斜めに擦りへっている。

撥形をした鍬形石器は、扁平の自然礫を使用し、一面のみは全体を加工して自然面をつぶしている。周辺加工は大きな剥離で撥形に加工し、細かな剥離によって、形態を整える。扁平な自然礫のほかに角礫（石核）から扁平剥片をおとしたもの（5、6）があるが、各部調整は2～4の扁平自然礫加工の撥形石器と類似する。これらは相当強度に使用されたと考えられ、3～7の如く半折のものが多い。

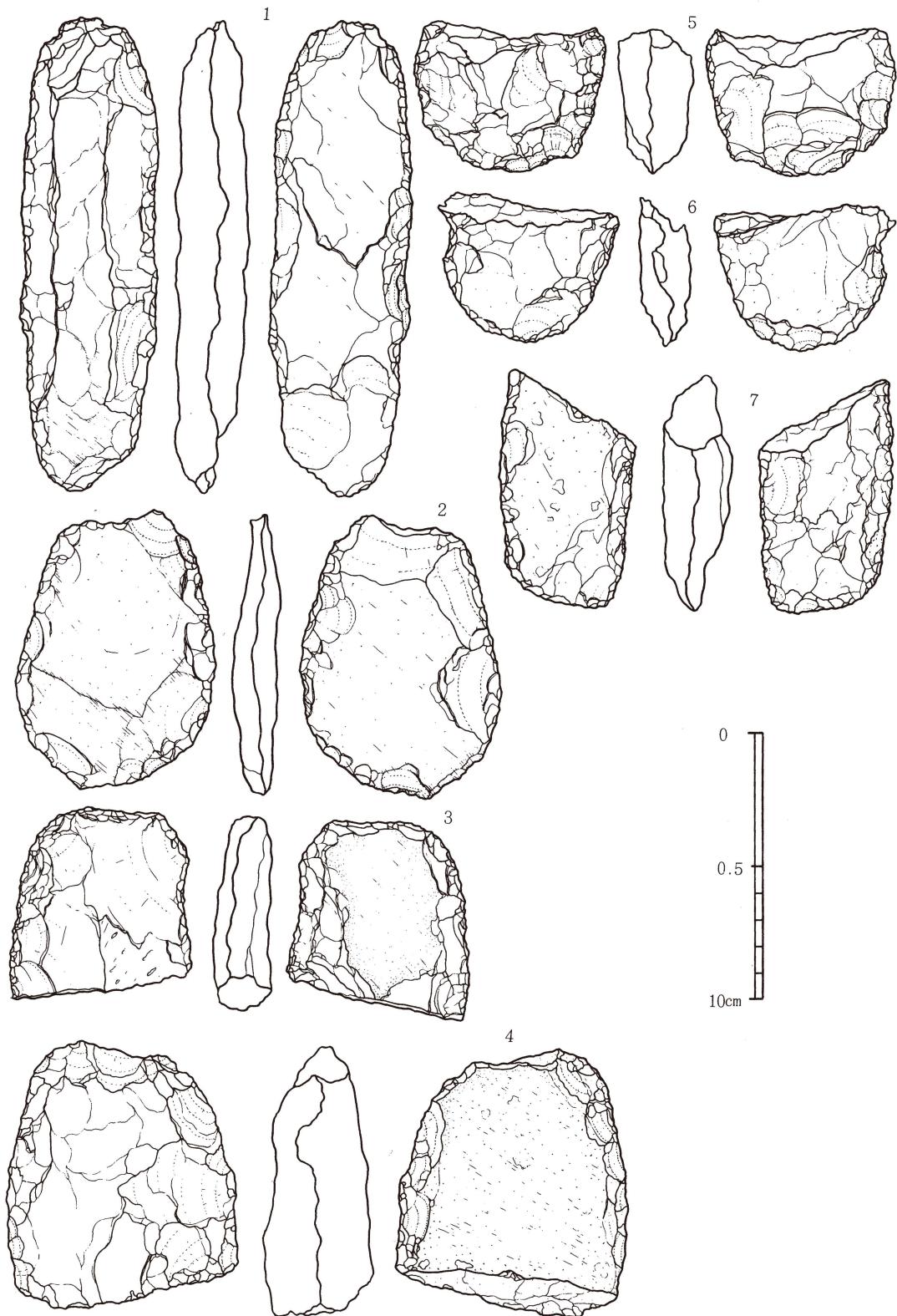
**石庖丁形石器**……石庖丁形石器と考えられる扁平石は4点（第22図、8～11）の出土があった。石材は安山岩を使用しているが、角礫などの石核から横剥ぎでおとされた剥片を利用している。8は縦位置の下部に小剥離による刃部がみられ、9、10は6cm巾の横長刀子状に整形し、下部を調整して刃部としている。

蛤状に整形された11は、角礫の第一剥離による剥片を利用し、a面には表皮を全体に残し、b面は大きな剥離面をそのまま残している。刃部は蛤状の腹縁のみに細かな調整片側剥離で形整されている。

石庖丁形石器は、刃部に擦痕、磨耗痕があることから穂摘みと推定されるものであって、他遺跡の如く、定形的な形態をみない。特に11は、Scraperとして把握すべきものであるが、石庖丁特有の磨耗と刃擦れのあるところから石庖丁形石器として一括することにした。

**剥片石器**……安山岩などを使用した扁平石器に比して、黒曜石や珪岩などを使用した小形石器は、全体として少なく鏃などの狩猟具の減少が目立った。

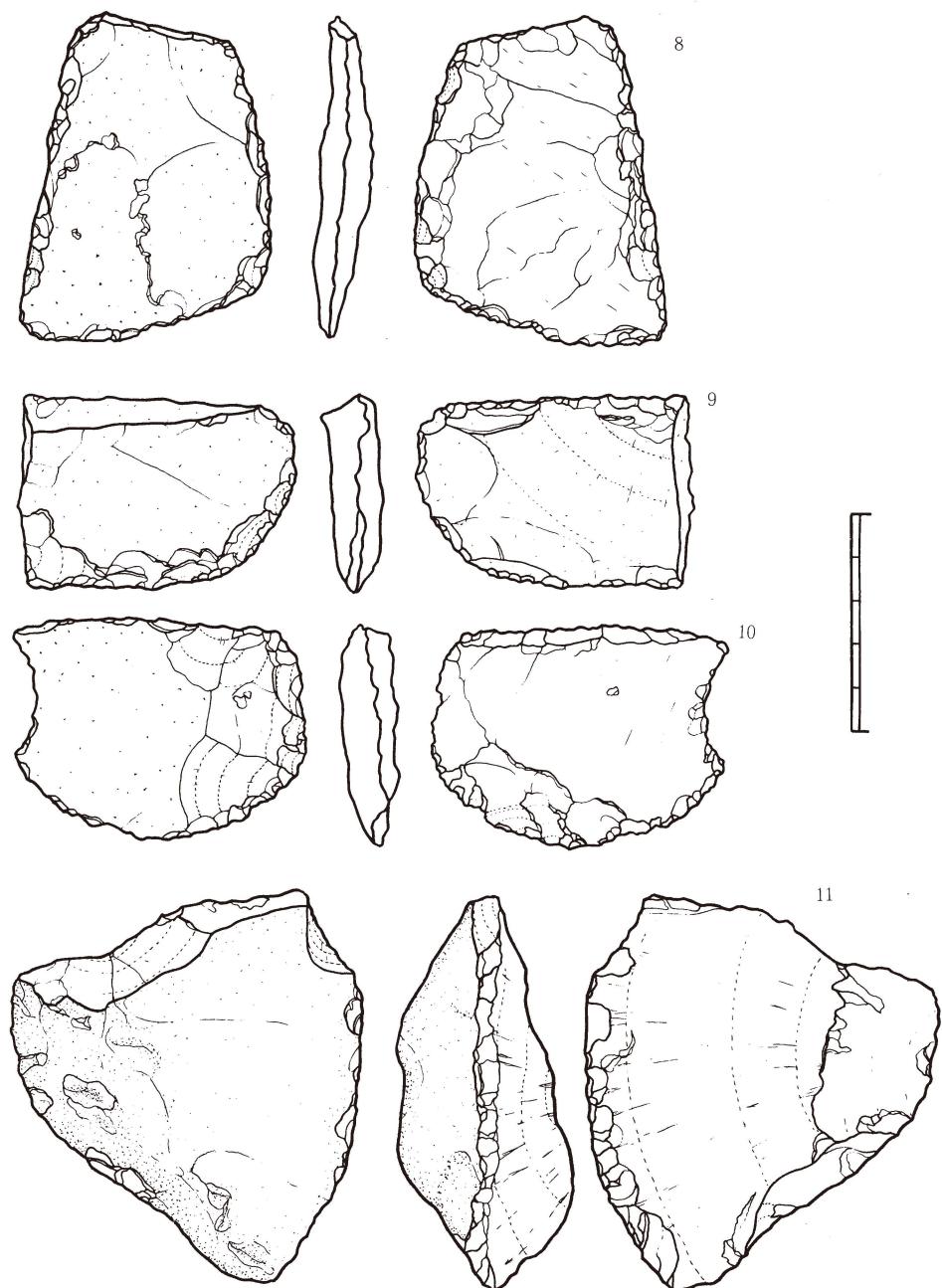
**石鍬**〔第23図〕 石鍬の出土は4点で、両面を細かく加工した、阿蘇系で断口黒色の光沢ある石を使用している。12、13は将棋の駒形に加工され、左右に駒形の肩がみられる。たゞし、底部には抉り込みがみられて、14、15の底部平らに整形された駒形鍬と区別される。この駒形鍬は一般に扁平で、整



第21図 石 器（耕具）

形のための細かな剥離は精度の高い技術である。

錐、錐の出土はわずかに一点で、棒状の原石（黒曜石）を加工し尖端を錐状に加工する。整形にあたって、細かな剥離を四方からおこない、全面に細かな加工痕を残す。



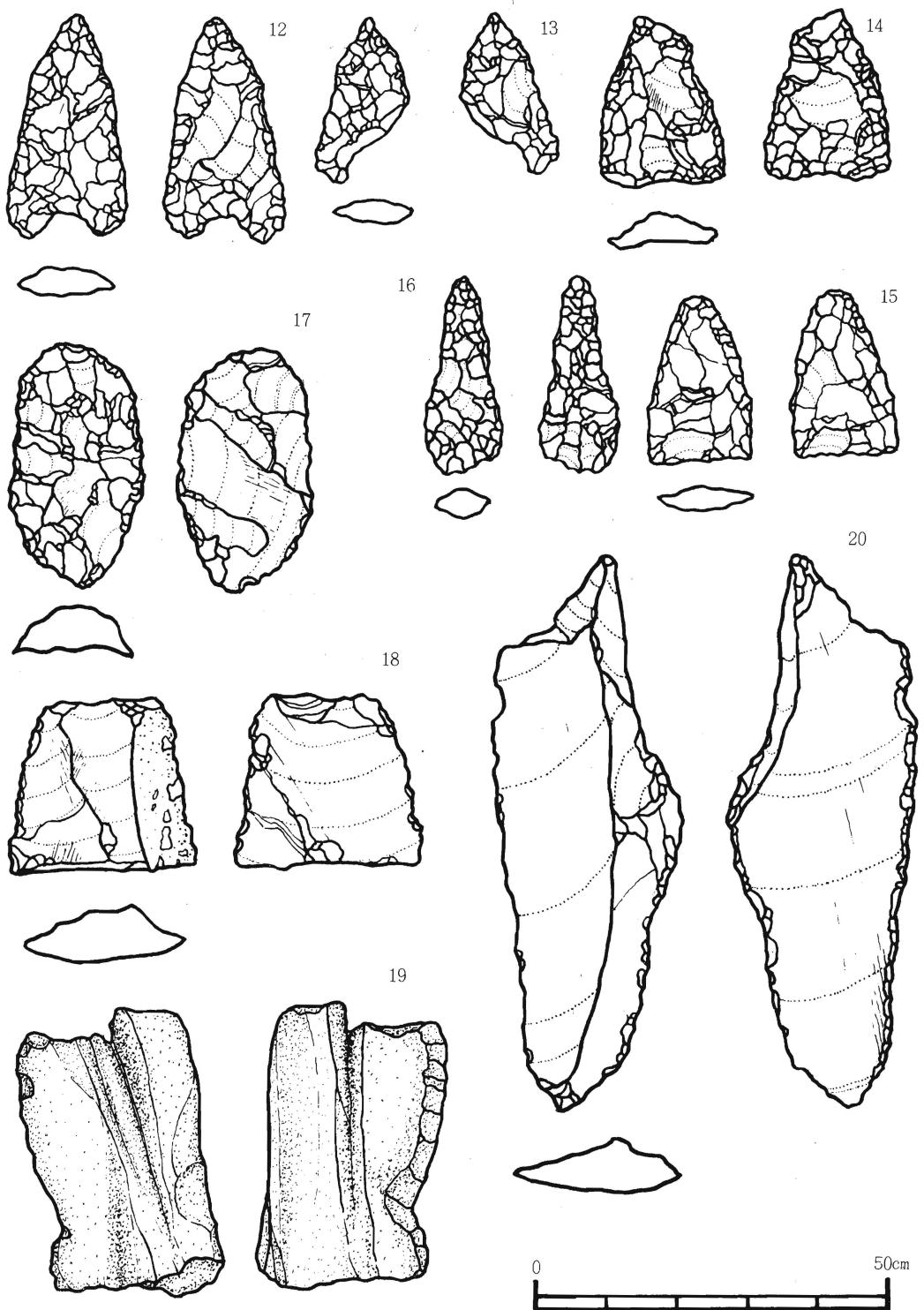
第22図 石 器（石庖丁形）

**不定形石器** [第23図] 石刃技法で剥離された黒曜石の石刃を、不定形のまゝ、その側面に細かい剥離をおこなったScraper (18、19、20) が発見されている。18、19は矩形に形を整えたside-Scraperで、20は一部に刃潰をおこなったナイフ形のScraperである。

#### 小結

横迫遺跡では、住居地帯を取り巻く条溝が、弥生式農耕社会の集落を決める単位としての環溝や条溝とよく似ており、これが縄文時代における農耕社会から出現したことを暗示している。今後、九州における縄文農耕の調査研究では、こうした住居址と、これを取り巻く社会構造を、孤立丘陵や、条溝など、あるまとまりある状態で把握する可能性が生じてきた。集落の構造は、定着して生産を営む農耕社会を決定するのにはどうしても明確にする必要がある。

土器、石器が、大陸農耕社会を意味する遺跡から発見されるのと全く同じで、その石器（道具）から縄文時代農耕の存在を推定することができた。加えて、条溝によって仕切られた集落の単位は、更に興味ある問題として、1971年度の調査を飾った。今後は石器の機能などに関する物的研究のほかに、集落の構造など社会的展望などを加えて、大陸、半島との関係に注意をはらわなければならない。



第23図 石 器 (剥片石器)



